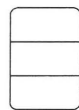


(表紙)

(異筆)
「前世界 二号
海舟日記4」
(ラベル)



「海舟日記」
第二号
自文久三年三月十六日至文久三年十月三日

(朱書 異筆)
「第二号 從文久三亥三月
到同年十月」

文久三亥三月より到十月

日記

二

日記二

当時諸
官、外英
を恐れ、内
激徒之天
誅を恐る、
縮首して
一事も断

之事にあらず、今幸に彼兵力を以て我邦を
圧せんとす、此好機会失ふへからず、一敗地に塗ら
は、数十年或は数百年之後、雄を天下に震ふ
へき国とならん、これはこれ人爵破れて天爵に
帰するを云なり、今一時之姑息を喜び、土崩

文久三年三月十六日

せず、吾か
これを論
する頗る
激言なれ
とも、願くハ
怯者をして
激せしめん
とにあり、
故に論次
これに及
ふ、又可
歎也

瓦解を恐るゝとも、終にまた遁かるへからず、今
試に其逢接之所置を論せは、先

將軍家は大坂城に御動座あり、英艦に申

ていわん、今京師朝勤之際、関東は大事を

談するに人なし、速に摂海に來れと、彼若

これを拒まハ、江戸にて逢接すへからず、

彼また此地に來れば、速其いふ處の償金

を与ふへし、而後彼か暴挙を咎て、断然

としてこれと絶つへし、若彼許容せずんは

此地に一戦を起し、天下の人民をして勝算

なきことを□さとしむへし、其実は唯一

敗塗地、国内真の憤発を待而已

十七日

池田修理、⁽²⁾ 図書頭殿御附添御免、⁽³⁾

帰御御供被 仰付、上京之由申来る

(1) 徳川家茂

(2) 池田長発(目付
外国掛)

(3) 小笠原長行(老
中格 肥前唐津藩世
子)

文久三年三月十七日、十八日

〔付箋 異筆カ〕
「十八日已下不用」

此頃、激徒
京師に群
集し、公卿

○午後、図書殿御旅館江参る、其家臣云、昨夜

深更京師より再ひ上京可有由申来り、今朝

御出立と云 ○当今我輩初閣老といへとも東

西奔走定りなく、朝令夕変、平常江戸

にての手續の如くならず、これ英艦金川（神奈川）に

鳴鞭（鞭カ）せんとし、京地議定なく、事々物々漸く

実地に赴むくを以て官吏失塗（墜カ）す、可歎々々

○午後、松勘（4）・津近（5）を訪ふ、頃日の不都合

を話す

夜に入り松本良順来る（6）

十八日

松本生来る ○松勘より文通、今日之寄合

佐藤与之助（7）を可出と也

○聞く、昨日 將軍家暫く御滞京之旨被

仰出、御供之面々へ増御手当被下候由、今夕又

（4）松平勘太郎信
敏 目付の略称
（5）津田近江守（正
路 勘定奉行）の略称
（6）將軍家茂の侍
医

（7）出羽庄内藩士
海舟門下 軍艦組出
役

を擁して
盛に攘夷
を唱へ、
幕府の
御所置失
策を咎む、
皆雷同
して是非
一定せず、
可歎、人心
一時に沸
騰して制
すへからざる
ことを、此輩
豈恐るゝ
に足らむ
哉

再被 仰出あり、廿一日御発駕、十四泊にて御帰

府之由御書付出ると云、これは英艦逢接の

事に因ると云 ○今夕津田近江・菊地伊予⁽¹⁾

上京すへき命あり、即刻上京と云

○因州侯昨日着阪の処、今日帰国、島⁽³⁾

津三郎もまた着阪、直に帰国するの風説あり、

三郎の上京するや、盛に開国の説を唱へ、前説

に反し、一兩日を経て出京すと

十九日

羽田重左衛門⁽⁴⁾来る ○筑前藩松本主殿来る、云、三

月大鵬船にて鹿児島に到る（海路四日を経

たりと云）、彼地砲台築造、弾丸之類無虚日

製作、下士専ら勉励して防禦の事を成す、其

国主修理太夫⁽⁵⁾はいつかたに居するや、人々云者な

く、挙政皆三郎之意匠に出つと云

(1) 菊池隆吉(外国
奉行)

(2) 池田慶徳(因州
藩主)

(3) 島津久光(薩摩
藩主父)

(4) 羽田正見(代官)

(5) 島津茂久(のち
忠義 薩摩藩主)

○江戸の風説を聞くに、下民騒然たる者半

にて、其半は依然として驚く者なく、唯侯伯の

妻子陸続として其所領に帰する者多しと云、

或は富る者は僻境に地を求め、妻子を送くる

者あり、就中飯米・諸品騰貴する日々也と云

○咸臨船より伴鉄太郎来る、云、当月九日之夕

刻出船すへきの命あり、同十日出帆、是は外国

奉行並柴田貞太郎、目付堀宮内乗組、急便

を京師に達すか為と云

十一日下田碇泊、此日相州洋にて英之カノ子^(ネ)

ール船一隻、多人数乗組しものを見ると、

十二日同所出帆、十三日鳥羽港に碇、これより

柴田・堀之兩人上陸、京師に到ると

○此夜、町奉行并松勘に命あり、予か造りし

石造塔雛形、京師に差上すへき趣、小目来り⁽¹⁰⁾

(6) 軍艦頭取

(7) 柴田剛中

(8) 堀利孟(目付
外国掛)

(9) 永井尚志(京都
町奉行)

(10) 小人目付の略

てこれを云、直に同人江訖す渡す

廿日

安井勘介来る、江戸市中の風説此地にも聞

へし由を云

○兵庫港碇泊 ○咸臨船より、昨夜外国奉行・

御目付小船にて大坂より来り、直に出帆之由

申来る

兵庫江仏郎西の軍艦二隻来る、此日長州

之世子和田ヶ崎巡見、此入津に逢ひしに、敢て

放発の事なく、空敷和田明神にてこれを遠

望せしと云（此先同家より、若内海江異

国の軍艦入津せは、幕府の命を報せず、

直に打放^(私カ)ハんと京師に申上しと聞く、今此事

あらん歟と役々心痛せしか、かへつて無事なりし

廿一日

(1) 安井九兵衛(大坂町方南組惣年寄)の息

(2) 毛利定広(のち広封・元徳)

弘暎、京師より菊地・杉浦并支配向召連、

順動船にて江戸江御遣可被成旨、和泉守殿

被 仰渡の御書付来る、同刻、同地監察大井

信濃(美)より、勘定奉行・大目付・御目付之内、江戸

表へ順動船にて被遣候間、用意いたすへき

旨、周防守殿被 仰渡之由文通あり、

当節之令如斯、孰れか是、孰れか非

廿二日

菊地・杉浦より、唯今着阪、夕刻御船江乗組

へき旨申来る、午前兩人来訪 ○聞く、京師

に於て、 將軍家廿日御参内之处、

主上御居殿にて御手つから御菓子等を給

はり、且親筆の御書被遊 御渡候由、其

親筆は、將軍職是迄の如く万事命令

すへく、又暫らく滞京せらるへき等也と云

(3) 杉浦勝静(正一郎のち誠 号梅潭 目付 御勝手掛・外国掛)

(4) 水野忠精(老中 出羽山形藩主)

(5) 大井信道(目付 御勝手掛・外国掛)

(6) 板倉勝静(老中 備中松山藩主)

(7) 孝明天皇

○当時危急之際に当つて、諸国主は帰国

し、朝議着落なく、関東の諸吏は旧習

に因循して一も移ること能ハす、如斯ならは

何れの日か衆議一定、興国の策立たんか

知るへからず、將其間奸雄私欲私策を

建て其欲を充てんとす、唯定天勝人之

時を待歟、また憤激して一戦せん歟

○聞く、春嶽殿⁽¹⁾辞職を乞はれしか、御許

容遅滞せし内、一昨日退京せられ、命

を領国に待つと云

廿三日

浜口義兵衛⁽²⁾来る、紀州家砲台并海岸

警衛の事相談相頼趣、紀家の家老久野⁽³⁾

丹波守の口上を申、尤京師江相伺、図書殿

へ罷出相願候由、即日京師に出立すと云

同人は再ひ

(1) 松平春嶽(慶永政事総裁職 越前藩前藩主 二十一日に退京)

(2) のち梧陵 紀州藩地士

(3) 久野純固(紀州藩家老)

廿四日

夕刻、図書頭殿明廿五日美濃路御帰府の趣、其家来より申来る、これは

將軍家御滞京に成りしゆへ歟、また他にゆへある歟

廿五日

松勘来る、京師図書殿より被仰渡の書付持参、

大坂表海岸御台場築立之儀被 仰出候

处、和田岬之義は緊要之地にも有之

候間、堅牢之炮台御取建、其余右江相

対候場所々々にも夫々御台場御取建

之筈に候、右は大膳⁽⁴⁾太夫御警衛持場

内江御取建之事ニ付、為心得相達候、

右之通、松平大膳⁽⁵⁾太夫家来江相達候間、

(4) 毛利慶親(のち
敬親 長州藩主)

(5) (4) に同じ

可被得其意候、且御台場築立相成候

上は、御旗本・御家人之内格別之人物

相撰、土着被 仰付候歟、又は交代ニ被 仰付

可然哉、何れとも一隊の規則相立、御預

被 仰付可然哉、夫々見込之趣十分ニ申聞

候様可被致候事

此御書付、三月廿日図書頭殿、柳沢勉次郎を⁽¹⁾

以て御下ケ

廿六日

京師川勝丹波・津田近江より来状、即刻

昌光船江達す

其略に云、能勢金之助長崎江急御用として⁽³⁾

被差遣候間、昌光船拝借被 仰付候、早々用意

可致云々

廿七日

(1) 奥祐筆か

(2) 川勝広運(勘定奉行)

(3) 能勢頼之(目付)

松勘より、能勢氏着阪、昌光船之否承り
度趣掛合来る、いまた兵庫碇昌光船より
返書不来趣を以て答ふ

○川村・鳥井より、京師町奉行永井主水正・
滝播磨守より之白木状箱差越候二付、受取
可申旨申越す

永井・滝川両氏之文通に云、別紙和泉守殿
片山与八郎を以て御渡二付、相送云々、
御書付 勝麟太郎

紀伊殿御領分海岸炮台之儀二付、其方江
御談被成度旨被仰立之趣も有之候間、紀州

江罷越、久野丹波守申談候様可被致候

○長藩小松辰三郎来る、同人長州表再亡

命、無処倚身云々を歎す

○千屋虎之助京師より帰塾、安岡金馬入門、

(4) 川村修就(大坂町奉行)

(5) 鳥居忠善(大坂町奉行)

(6) 永井尚志

(7) 滝川具拳(京都町奉行)

(8) 奥祐筆格

(9) 徳川茂承(紀州藩主)

(10) 志士 土佐藩出身 海舟門下

(11) 土佐藩士

千屋生同道す

廿八日

長藩志道聞多・山形莊藏来る、摂海之

警衛并対州島危険なる形勢を論す

浜口義兵衛来る、聞く、京師にて春嶽公勅

定に応せず候事も有之、逼塞之命下たる

と云、此事云々有之故歟

当夜小松生江金三郎并竹川竹齋江書を

送くり、倚身の事を頼ミ遣す、彼か困逼

落魄を憐れむゆへ也

○田所島太郎来る、容堂殿昨日京師出立

之事を聞く、又聞く、一昨日江戸より監察

京師に来ると、其謂不分明

今朝、能勢氏阿弥陀寺船にて長崎江出立、ゆへに

昌光船拝借御断返申上る由、松勘より申来る、

(2) 越前老公は諸家より申上、京師より之御沙汰ニ因て政機に預かれしに、其説無謀攘夷にあらず、又激徒の説をとられさりし故、又讒言して進退極まらせ、自から退去せしむと云

(1) 長州藩士の井上馨

(2) 松平春嶽(慶永越前藩前藩主 政事総裁職を辞し帰藩中)

(3) 小松辰三郎(志士 長州藩出身)

(4) 伊勢商人

(5) 田所壯輔(土佐藩士)

(6) 山内容堂(豊信前土佐藩主)

直に此事を兵庫港昌光船江通す

廿九日

長藩⁽⁷⁾山県半蔵・桂小五郎来る、予云、海軍

興起は護国之大急務、後世の基本成るへ

し、今後れたりとて手を下たさゝる時は、後

また今の如く、終に興起之基立へからず、今用

に応せさるとも、後世の国益を思ハさるは丈夫

之事にあらずと、兩人同意、直に

朝廷に奏せんことを約す

○川村より、御城代松平伊豆守下屋敷にて伊⁽⁹⁾

達遠江守御用談有之ニ付、出席可致旨、御城代⁽¹⁰⁾

之命を通す

午後、御城代屋敷江行く、御城代面会、当地之

警衛大略を云、庸人不足論

伊達氏に面会、天下之形勢終に不可図と

(7) 長州藩士の
ちの宍戸璣

(8) 長州藩士の
ちの木戸孝允

(9) 松平信古(大坂
城代 三河吉田藩主
のち大河内と改称)
(10) 伊達宗城(伊予
宇和島藩前藩主)た
だし遠江守は現藩主
宗徳のこと

いつて、唯々歎息してやむ、此人英邁、諸侯
中の一人物、尤談するに足れり、明日帰国の
由、京師之形勢無着を密話せらる、これ
云へからさることあり

晦日

紀州若山^(和歌山)江出立

此日好天気、貝塚へ泊せんとせし処、紀家御簾中⁽¹⁾
同所御泊ニ付、岸和田江一泊

四月朔日

泉州田川江泊す、此地は僻境、土屋采女正領所⁽²⁾
にて小湊あり、庄官戸口仙蔵方江泊す、途中より

雨

二日

紀州加田^(本)江泊す、紀家の書物方高木儀右衛門迎
として途中に逢ふ、友ヶ島奉行酒井伊織

(1) 紀州藩主徳川
茂承正室則子

(2) 土屋寅直(常陸
土浦藩主)

来る ○浜口義兵衛(儀)を若山江遣す、聞く、明後日
紀伊殿此地の海浜巡見之事ありと

三日

若山表江着、片原町福島屋平左衛門方旅
宿、田中庄藏諸事周旋、夜に入り御用人向
笠三之助、書物方津田楠左衛門来る、友ヶ島防禦
炮台の事を云、且明日伝法と唱別館にて、重役
久野丹波守・岡野平太夫・佐野出羽守出会、海峡
防禦之策を問ふ趣を申

四日

伝法之別館江到る、久野初海防掛数人出席、
友ヶ島警衛之事を議す、予云、海国之兵備必
らす海軍にあるへし、区々として炮台を守るは我
か意にあらず、然れとも此島たるまた銃備欠く
へからず、我か兼て建議せし草稿あり、これ

(3) 徳川茂承(紀州藩主)

其大意なり、今此意を説解せは、武臣武

を忘れ、専ら一家の経営を先するに過ぎず、

ゆへに万弊生ず、これを撓むるにあらされは、

一事も実践に到らざるへし、猶許多云々、

且明後日友ヶ島に炮台之地勢を見んこと

を約す

五日

(和歌山)
若山城江到る、
(1)
中納言殿江拝謁

六日

跡五

(五)
九日加田江到り泊す、但紀の川より鯨舟にて同所

加田友ヶ
島奉行
酒井伊織
田宮儀右衛門

江到る、掛り之役々出張、炮台之位置は紀家の

定むる処に因る、此国もまた費弊国財不足、

皆これよりして行ハれず、六日若山江帰へる、

陸路を馬にて上乗る行道程三里、若山の市前

紀の川あり、舟渡

七日

(1) 徳川茂承(紀州藩主)

乗馬にて市中并紀の川口を見る

佐々木三郎・横幕永居・太平某来る

八日

午後、鯨舟にて紀の川口より加田江^(本)到る、同所一泊

九日

友ヶ島并母江城崎の炮台を見る、且其位

置を議す

十日

藩人一両輩来たる

伝法の館にて、久野氏に友島

炮台并海軍の事を談す

十一日

坂本龍馬大坂より来る

明日若山^(和歌山)表出立いたし度旨申之、同夜侯より

白銀・忍冬酒を給る、夜に入、向笠三之助来る

○菊地⁽²⁾海莊来たる

龍馬順動船にて一昨日大坂江帰りし由、大越⁽³⁾

の書状并宅状持参、江戸の風聞を聞く

(2) 紀州藩地士
(3) 大久保越中守
(忠寛)の略称

十二日

藩人数人来る、海軍稽古の事を談す

十三日

夕刻、小船にて紀の川より大坂江出帆、同夜
内海を乗る

十四日

午前帰阪、夕刻津田近江⁽¹⁾を訪ふ、聞く、京地
内外混雑、殆ど安静ならず、これ皆小節に
奔走し大策なしと、此ゆへに日夜多事

錯乱而已なりと云

十五日

津近⁽²⁾より、当地因・備持場の炮台之義二付、伺
書下調相廻る、直に鳥井^(尾)越前江達す
紀家の炮台掛俊平⁽³⁾・良平^(他多)兩人来る、石造
塔其他尋問の為なり

(1) 津田正路(勘定奉行)

(2) 津田近江守(正路)の略称

(3) 栗山俊平(紀州藩士)か

十六日

龍馬越前江出立、村田江一封を遣す⁽⁴⁾

紀家の鍵野生入塾

十七日

十八日

津田へ到る、松勘昨日帰阪、同所にて面会、⁽⁵⁾

兵庫操練局之義を説く、聞く、近日京師

より閣老之内御下阪之由、御船々用意すへ

き旨あり、即刻兵庫江申遣す

十九日

風邪、鬱々として旅宿に蟄す

廿日

松勘より如別紙御書付来る、云、

摂海は枢要之地ニ付、形勢為

御覧置、

(4) 村田氏寿(越前藩士)

(5) 松平勘太郎(信敏目付)の略称

(1) 公方様明廿一日此地江被為 成候旨被 仰出候、尤

石清水社江御参詣、夫より此地江被為 成

候事に候条、京地老衆より申来候、

右之趣向々へ可被相達候

即刻松勘方江到り、同所より順動・昌光

船明日中天保山沖江可来旨相達す、

これは御船にて内海御巡覽之積有之

ゆへなり

廿一日

当地江 着御二付、午後より登城、御座敷向

拝見

夜に入、津近・松勘同道にて京橋口御船着

場まで為 御迎参上、夜五ツ時御船着、

御入城、深夜退出

廿二日

(1) 徳川家茂

登城

明日順動船にて兵庫・西宮辺江被為

成旨被 仰出、夜に入御治定

廿三日

払暁、御乗船場堂島川江出張、夫より

天保山江到り順動船に到る、

端舟にて同所江御出迎、御先江漕返す、四ツ時

頃御本船順動江

御乗船、即刻出帆、

船内悉く御巡覧、御満足之由、度々

上意有之、当

將軍家いまた御若年といへとも、真に

英主の御風あり、且御勇氣盛なるに恐

服す、九ツ時前和田ヶ崎江御着船、

以 思召端舟にて同所へ御登岸、御供に

候する者纔に五・六輩、臣御後にあり方

向を示令す、和田明神の社江御休息、

夫より再び端舟に御駕、神戸江被為

成旨命あり、御供同断、

同所にて、操練局御開、且土着之者可置

事を言上、直に英断あり、於

御前被 仰出議悉く成る、

夫より西之宮江向き出帆、同所江御上岸、

また端舟を被用、西風少強波を打込、

上少も動し給ハす快活之旨、度々

上意、

夕刻天保山沖江御帰船、直に御登岸、

御供にて登 城、深夜退出

廿四日

登城

今朝、来月十日攘夷御拒絶被 仰出ニ付、当

地御警衛之事、御用部屋にて議あり、悉

く空論

昨日御船江被為 召候ニ付、以御書付拜領物

被 仰付

(10行空白)

夜に入り、明朝姉⁽¹⁾ヶ小路少将殿方江罷出へく

旨御書付にて被 仰渡、且御同人蒸気船拜

借、兵庫江参られ候旨承知、直に順動船

江申遣す、御書付云、

勝 麟太郎

(1) 姉小路公知(公
家 国事参政)

明廿五日朝五時頃より、麻上下着用、西

本願寺内姉小路少将旅館江摂海

絵図持参いたし罷越候様可被致候、尤右

之趣姉小路へは相達置候事

本日神戸村土着之士、且操練局・造艦所

御取建掛被 仰付

勝 麟太郎

摂州神戸村海軍所・造艦所御取

建御用并摂海防禦向御用被

仰付之

津田近江守

勝 麟太郎

松平勘太郎

摂州神戸村海軍所・造艦所其外

御取建相成候ニ付、右御入用并絵図

取調、可被差出候事

廿五日

朝、姉小路旅館に到り面会、摂海警衛之事を問ハる、答云、海軍にあらされは本邦の警衛立かたし云々、長談皆聞かる、即刻順動船に駕して兵庫港に到らるへき旨なり ○午後御乗船、直に出帆、従属百廿余人、船内猶前件之事を申、倍従マコの諸士と論弁す、大低同意之旨なり、嗚呼我か此邦家の御為に此説を主張するもの殆七・八年、終に今日に到り纔に延ふる処あるかことし、然れとも天下の形勢切迫、国財減耗、如何とも成すへからず、可歎、其議を実事に行なふに暇なきことを 此夜、兵庫江御一泊

廿六日

姉小路殿摩耶山江御出、

午後御乗船、直に紀州加田江^(本)到らるへき旨

御談有之、云、本日暑氣非常、必らず烈風

歟或は雨降らんとす、然かす速に大坂に

御帰船には、且加田行は他日可然といふ、

皆聞かる、直に大坂江帰船、夕より雨風、

夜に入り旅宿に帰る

廿七日

登城、昨日姉小路殿巡覽之転末、且議

^(衍み)
議せし処を申す

○明日

公方様堺より順動船江御乗船々々中

御一泊にて内海御巡覽あるへき旨被

仰渡

今日、神戸村江土着其外被 仰渡之御書付

⁽¹⁾
貞阿弥相渡す

勝 麟太郎

摂州神戸村海軍所御取建相成、土

着之者追々御引移可相成候、就而は

海軍所御入用并稽古入用として

年々金三千両宛可相渡候間、御取締

は勿論御実備相成候様取扱、年々

御勘定仕上けいたし可被差出候、尤津

田近江守・松平勘太郎江掛り被 仰付

候間、可被談候事

、
、
、
、
、

其方、拝領高之内五拾俵、摂州神

戸村最寄におゐて、地方に御引

(1) 池田貞阿弥(同
朋頭)

替被下候間、委細は御勘定奉行

可被談候事

、 、 、 、 、

摂州神戸村最寄江相對を以

て地所借受家作いたし、海軍

教授致し候儀、勝手次第可被致候

事

今朝、桂小五郎⁽¹⁾対馬藩大島友之允同道にて

来る、朝鮮の議を論す、我か策は当今

亜細亞洲中欧羅巴人に抵抗する者なし、

これ皆規模狭小、彼か遠大之策に及ハさ

るか故なり、今我邦より船艦を出たし、

弘く亜細亞各国の主に説き、横縦連

合、共に海軍を盛大し、有無を通し

(1) 長州藩士
ちの木戸孝允の

學術を研究せすんは、彼か蹂躪を遁

かるへからす、先最初隣国朝鮮よりこれを

説き、後支那に及ハんとすと、同人悉く

同意

廿八日

払暁、順動船を堺江廻す、これは

公方様堺筋まで陸路 御巡覧、夫より

御船にて加田^(本)辺江被為 成に因る、八ッ時

御乗船、紀淡之間江向け出帆、夜に入

るを以て引廻らし、紀の大川沖に御一泊

本日姉小路殿も同所より長崎廻之蒸気

船にて加田江到らる

廿九日

払暁、加田港に到る、

御登岸、午後御帰船、夫より友ヶ島・

由良江到らるへき旨閣参諸役の議有、

予云、雲行よからず、必らず夜に入らば

烈風或は雨ならんとすと、此両事を

以て

上聞す、仰に船内他議然るへからず、

麟太郎の決に従ふへしと、此

英意にて諸議定まり、大坂に御帰

船、御供にて登城

五月朔日 烈風雨あり、皆我議を喜ふ

朝、姉小路殿江到り拝謁、海軍并炮台

の事を申す、且友ヶ島近傍測量の

図を呈す

午時登城、御用部屋にて対馬并

朝鮮の議あり、大低我説聞かるへき

形勢あり

明日御船にて内海御巡覧の旨あり、

天気合にて夕刻御延引

今日八幡・山崎江関門すへらるへきに依

て、修築御用可相勤旨御書付を以て周⁽¹⁾

防守殿より御達、これは会津の建議

によると云

、
、
、
、

此度八幡・山崎江関門修築等相成候間、

其方儀経営方引請可相勤候、尤

御用多之事二付、附切相勤候には不及

候間、修築中は航海之序等を以

折々見廻候積相心得、諸事松⁽²⁾

平肥後守江承合候様可被致候事

⁽³⁾
藤堂和泉守江
同人御家来

(1) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

(2) 松平容保(京都
守護職 会津藩主)

(3) 藤堂高猷(伊勢
津藩主)

(1) 広瀬元恭

右、此度八幡・山崎江関門修築

相成候間、勝麟太郎手ニ附右御用

御雇可相勤旨可被申付候、委細之義

は松平肥後守・勝麟太郎可被承合候

(2) 牧野備前守江

京都医師

栗原唯一

同文言可申渡旨、町奉行江可被達候

別紙之通、藤堂和泉守・牧野備前守へ

相達候間、可被得其意候、且又松平肥後

守家来之内にも業前相心得候者

御雇可被 仰付筈ニ付、可被得其意候事

(3) 〇備前侯より拝借被相願候スクーフ端舟打

(1) 伊勢津藩医

(2) 牧野忠恭(京都
所司代 越後長岡藩
主)

(3) 池田茂政(備前
藩主)

建可申御用、周防守殿被命^{より}

二日

天気佳ならず、御出船を止む

三日

海面いまた穏やかならず、今一日御見合

可然と申す、此議にて被^{より其}仰出なし

○明石井土州^場持木津川の炮台図面を

乞ふ ○明石より賜物あり、潮田范三⁽⁴⁾来る、

此国⁽⁵⁾の老侯早春^江微物^ヲ呈せし返礼と云

四日

朝、御乗船、明石舞子之浜江出帆、

御上陸、炮発 御覧、夫より由良江御出帆、

同所銃台にて放発 御覧、夕刻御帰船、

夜十時頃天保山沖江投錨、夕刻より

微雨、海面暗黒、苦心昼間に十倍す

(4) 播磨明石藩用人

(5) 松平齐韶(播磨明石藩前々藩主)

五日

朝帰宅、昨日已来腹合よからず、帰後暴瀉、半身摩(マ)す、一日空々として臥す

六日

登城

神戸海軍局之図を津田⁽¹⁾・松平⁽²⁾に示す、積り方大工江可⁽³⁾命旨相談整ふ

村松出羽殿、船中一同江御褒美の事を被談

七日

腹痛平臥す

明石藩、砲台之事にて来る

順動船乗組両三輩来る

大島友之允同藩樋口謙之允同道にて

来る、朝鮮連合之議、速にせんことを議す

(1) 津田正路(勘定奉行)

(2) 松平信義(目付)

(3) 村松武義(側衆)

(4) 対馬藩士

順動船 頭取 荒井 柴八 堀次 小笠原 杉浦 加藤 兒玉 杉本 島津 役岩 大下 俗石 医安井 鼓手 小田

八日

夕刻、奥向にて御用有之間、明日登城可
致旨、能勢金之助より文通
佐藤与之助に町奉行和田崎砲台縄張として
出張すへき旨達す

登城

佐野伊予守江面会、同人御奥より船中江
被下物相渡す、如左

縮緬二反 頭取 七百疋宛 士官八人江

五百疋宛 俗事・医師・稽古人十一人江

三百疋宛 水夫・火焚小頭四人江

百疋宛 平水夫・平火焚七拾人江

同断 大工・鍛冶四人江

右は順動船乗組

五百疋宛 頭取初士官十二人江

(5) 能勢頼之(目付)
(6) 軍艦組出役
海舟門下

(7) 佐野政美(小姓
組番頭格御用取次見
習)

(8) 荒井郁之助

(9) 柴誠一

(10) 堀貞次郎

(11) 小笠原賢蔵

(12) 杉浦金次

(13) 加藤多宮

(14) 兒(小)玉織部

(15) 杉本録次郎

(16) 島津文三郎

(17) 安井春潮

稽古人

永井

長谷川

小栗

朝夷

留井

芦田

五藤

昌光船

頭取

塚本

士官

小林

鈴木

市川

荒井

高山

俗

松岡

仙

近藤

馬

水夫・火焚小頭四人江 二百足宛

三両貳朱 平水夫貳十五人江

三分 平火焚四人 鍛冶・大工貳人江

右昌光船

○江戸より咸臨船入津、竹本甲斐乗組⁽¹⁾

来る、魯国献貢之太炮二挺、附属品并

ホートホイッスル摺重台、操練局より送り来る

○神戸操練局之図出来、掛り江廻し、早々

取掛之積申談

○周防守殿より諸太夫被^(ママ) 仰付へき御達有之、

辞して云、当今危急存亡之秋

上之厚意肝銘すといへ共、微臣一介之功

なく、徒に高官に進まんことは元より素

願にあらず、恐縮に堪へざる処といへ共、固く

御免を蒙り度旨、再三歎願す、

(1) 竹本正雅(神奈川奉行)

(2) 塚本桓輔か

(3) 鈴木録之助

(4) 高山隼之助

(5) 近藤馬之助

新田俊
稽古人
鈴木清
水品才

大夫風雲之会に乗して、私身を以て先
せん哉、我等深く恥る処なるを以て、固
辞して終に拝命せず

九日

登城 今日

御所より被 仰進旨あり、周防殿御渡

一、浪花城は摂海咽喉之地故、主将無之候ては

難相成候

思召候間、可然大藩撰探有之、南海警衛

有之候様指揮可有之事

一、堺之津は実に異賊要衝地故、武備別て

充実無之候ては難相成候処、立花⁽⁷⁾飛驒守殊

之外国力疲弊之由被

聞召候間、可然大藩交代有之事

一、制鉄所之儀は、当時長崎二ヶ所⁽⁴⁾有之候へ共、攘

(6) 鈴木清三郎

(7) 立花鑑寛(筑後
柳河藩主)

夷ニ付ては、堅艦巨礮必用之器械ニ候間、於便

宜之地、^(ママ)广大之制鉄所新規取立ニ相成、各藩

へも艦礮十分に行届候様可相成候事

右三ヶ条、早々令命有之候様

御沙汰候事

海軍并器械製作之議、^(ママ)他年為邦家ニ

驚力を尽せしに、一朝姉小路殿に説解⁽¹⁾

せしに、公英明之見を以て終に

奏聞を経られしによりけむ、今日此

御沙汰を拝聴す、我か微衷

天朝に貫徹し、興国之基漸く立たん

とす

○周防守殿御渡⁽²⁾

松平勘太郎
勝麟太郎 江

摂州神戸村江製鉄所御取建相成候積

(1) 姉小路公知(公家 国事参政)

(2) 板倉勝静(老中 備中松山藩主)

明石家老
砲台掛

相心得、巨細之義取調可被申聞候事

○同断御渡

口上覚

兵部大輔領分播州明石海岸四ヶ所⁽³⁾

砲台之内、今一層堅牢改築被

仰付、難有被奉畏候、早々改築仕度候、付

ては万端御差図之儀、勝麟太郎様江御頼

被申度、就ては御用透之節、在所表江

御越、場所御見分万事御差図被下候様

被致度、此段奉願候様兵部大輔申付越候、以上

五月七日

松平兵部大輔家来^(左)
大島治部右衛門

付札

勝麟太郎江相達置候間、得

(3) 松平慶憲(播磨
明石藩主)

文久三年五月九日

丹羽安房
織田安芸
間宮能登

其意、篤と申合、改築方万
事申談候様可仕候

覚

別紙之通相達候間、得其意、御用透
見計、改築方等差図可被致候、
尤支配向等可成丈召連不申、実意ニ
研究候様可被心得候事

御同人御渡、御目付達す

、、、、

御用有之候間、明後十一日

御帰京、翌日京地江可被相越候事

五月九日

○明後十一日御帰京之被 仰出有之

十日

登城

○周防守殿被仰渡

松平伊豆守⁽¹⁾

大坂町奉行 江

勝 麟太郎

清水附之者不残大坂江勤番として引越、

御城代支配被 仰付候、右御切米・御扶持方

等於大坂御蔵被下候積、住居之地并に

防禦手組教示之仕方等、早々勘弁

可被申聞候事

十一日

大坂より 御上京

十二日

夕刻、引船にて上京

十三日

(1) 松平信古(大坂城代 三河吉田藩主のち大河内と改称)

伏見江着、午後二条城江到る

十四日

休 対藩大島生来る、征韓の建白書持参、此事
を議す

十五日

登 城 松平肥後殿江謁し、八幡・山崎関門御修
築の議を申す ○夜、広瀬元恭来る

○司農・監察⁽⁴⁾・監察⁽⁵⁾へ征韓の大議を説解す、今日
城中此議あり、俗吏囂々、皆不同意と云

十六日

順動船へ書を遣す、これは備前侯の大工端
舟打建之事ニ付、其始末并端舟一見の許を申
送る

○仙石藩多田某・桑名藩某来る

○龍馬子を越前江遣す、村田生江一書を附す、

(1) 大島友之允

(2) 松平容保(京都
守護職 会津藩主)

(3) 伊勢津藩医

(4) 勘定奉行の唐名

(5) 目付の唐名

(6) 池田茂政(備前
藩主)

(7) 多田弥太郎(但
馬出石藩士)

(8) 坂本龍馬(志士
土佐藩出身 海舟門
下)

(9) 村田氏寿(越前
藩士)

これは神戸江土着被命、海軍教授之事ニ付

費用不供、助力を乞ハむ為也

○大坂内海之測量図出来、同所より来る

十七日

広瀬生を八幡・山崎江遣ハし、地勢を見せしむ

○夕刻登 城 摂海の測量図を呈上、

順動船急々御用有之ニ付、御修覆速にすへき

令あり

十八日

越藩千本弥三郎・中根某外一人来る

○夕刻、中根鞆負来る、春嶽公より短刀⁽¹⁰⁾貞宗一振・

菓子等を給ハる、これは当春御上阪之折御約

束ありし趣にて賜ハると云、固辞再三、終に拝

受す、同人江当今危険益極まる、歎息の談

の談あり、且老侯の国家之為に心力を被尽

(10) のち雪江 越前藩側用人

(11) 松平春嶽(慶永越前藩前藩主)

越前一国一致、近州其風に化すを敬慕す

○大島生来る、征韓の議因循して決せず、事

機失せん歟と歎す、我云、姉小路殿江附て

上言せは可成らん、此人へは我前日其端を開

らき置けり、恐らく聞かれんと云

十九日

登城

聞く、江戸にて英艦の将江、生麦其他之不都

合ありし故に、償金として (ママ) 渡すと云、

此一事甚秘密、当地之閥老・諸官知ること

なし、去る八日(1)圖書殿御船にて上京の沙汰ありし

か、夜中横浜に到り応接あり、其時にや、英

船炮台を取巻き、虚勢を張つて官吏を

圧伏し、終に償金を受取るに到りしと云、

此風説のことくならは、官吏之為す処甚た僻事

(1) 小笠原長行(老
中格 肥前唐津藩世
子)

なり、若償金渡すへきの理あらは、断然として
秘すへからず、其転末公平至当を以て成すに、
何ぞ秘するの理あらん哉、

江戸の諸官は、事を京地の吏に告げず決断し
て事を取る歟、或は草莽書生輩の沸騰を
恐れて密事を以てする歟

又聞く、江戸にて鬭争起らんとすと云御触しハく
達すといへ共、都下の諸人常として実とせず、或
は一恐を喫して家財を失し賊難に逢ふ者
甚多しと、漁陽鼙鼓動地来、又咸豊帝之
遁走想像すへし、これをおもへは落涙止め
かたく、また憤怒衝髪

○中根生来る

廿日

廿一日

登城

聞く、昨夜四ツ時、姉小路殿退朝之折、御築地の辺にて、何者やらむ刃を振ふて胸間をさし逐てん^(電)すと云、此人

朝臣中の人物にて大に人望ありしか、何等の怨にやよりけん、此災害に逢ハれし、小子輩此卿に附きて、海軍興起より護国の愚策

奏聞を経て、既に御沙汰に及ひしもの少なからさりし^に、実に国家の大禍を致せり、歎息愁傷に堪へず

廿二日

登城 長崎の製鉄所、操練局附属と成す

へき伺済む、此議一昨閣老江申せしに、今日其御沙汰あり

○大島生来る

(1) 姉小路公知(公家 国事参政)

○土藩⁽²⁾吉村虎太郎来る

廿三日

登城 周防殿江神戸操練局之人員御召寄并

長崎製鉄所の御下知、征韓之御沙汰有之度旨

申す、且天下の勢累卵のとし、阪城江暫

御滞在可然歟之由を秘告す

○雷門船近々大坂江入津の聞へあり、津田⁽³⁾近江同

所江下たる、これは図書殿御上京、兵士を率ひて不

利の風聞密告する由、ゆへに

御所向の聞へよろしからず、上京を御止め、且江戸

の模様を承る為と云

○大坂より門生四人上京、これは京師殺伐之風

聞昨夕同所江聞へ、不穩ならんとおもふか故也、

当節京地更に無異

○明日下阪すへき趣を申乞ふ、

(2) 志士 土佐藩
出身

(3) 津田正路(勘定
奉行)

これは姉小路殿横死後

御所向穩かならず、また外に言上すへき御方なし、

其実は近々学集院江参上し、万事を上

奏せんとおもひしに、時到らす禍起、其甲斐なき

を以て、一旦下阪すへきと決定す

○^①広瀬生御扶持方之義を、町奉行永井・^②滝川^③両

氏江談す

大坂より内海測量の図来る、此図は姉小路殿

に約し、奏呈せんとせしもの、

^④川勝氏江頼ミ、閣老より

御所江進呈することを申置

廿四日

京地出立、^⑤対州侯之馬借用、伏見を経て八幡の

橋本宿江着、一宿

広瀬・栗原^⑥同伴、八幡・山崎之地勢一見、関

(1) 広瀬元恭

(2) 永井尚志(京都町奉行)

(3) 滝川具拳(京都町奉行)

(4) 川勝広運(勘定奉行)

(5) 宗義達(対馬藩主)

(6) 栗原唯一(京都医師)

門胸壁の議を定む

当地の警衛阿部主計頭⁽⁷⁾か藩四・五輩来る、主計公より酒一樽を賜送らる

廿五日

川船にて大坂江帰着

上京出立之日、安井九兵衛を頼ミし門生⁽⁹⁾広井岩⁽⁸⁾之助之父讐、手掛り分りたることを聞く、此事二付、同日新宮馬之助⁽¹⁰⁾を紀州江遣す

廿六日

廿七日

紀州より広井生之讐、紀家にて召捕入牢せしに、当人に無相違ゆへ、助太刀として千屋虎⁽¹¹⁾之助・佐藤与⁽¹²⁾之助を遣す
○江戸より前河内愛助⁽¹³⁾来る、大越之書翰⁽¹⁴⁾参^レ持、同人云、天下に奸人あり、君察知するやと、云、

(7) 阿部正方(備後福山藩主)

(8) 大坂町方南組惣年寄

(9) 土佐藩出身

(10) 志士 土佐藩出身 海舟門下

(11) 志士 土佐藩出身 海舟門下

(12) 軍艦組出役 海舟門下

(13) 沢村惣之丞(前河内愛之助は変名志士 土佐藩出身)

(14) 大久保越中守(忠寛)の略称

然り、今誰かこれを察せさらん、我おもふ所

あり云々、其要は征韓の一事また其奸を

防ぐに足る云々 ○同人川端少将殿江行く、

川端殿は頗る思慮あり、能く国家の事情

を解す、然れ共其力衆議を弁解し、

天朝正大の御意を更張すること不能と云

○午後、松平⁽²⁾大隅御役宅にて寄合あり

○兵庫江蟠龍船入津の告あり、津田・松平・

有馬⁽³⁾・小子四名之書状を以て京師江出す

廿八日 ○⁽⁴⁾

廿九日

○夕刻乗船、兵庫江到る、

払曉着船、和田ヶ崎炮台御修覆所巡覧、

神戸操練局御取建所一見

○塩之地・諏訪山の地所を見る、当所の名主四郎太⁽⁴⁾

(1) 河端公述(公家
国事御用掛)

(2) 松平信敏(五月
二十二日大坂町奉行
に任じ、大隅守を名
乗る)

(3) 有馬則篤(大坂
町奉行)

(4) 生島四郎太夫
(神戸村庄屋)

夫成る者に道に逢ふ、生田堤下の畑地譲受
の事を談す

晦日

馬にて明石江行く、舞子浜に一宿、炮台之縄
張築造の事を談す、明石の大夫三人・潮田生
来り万事を談す

○午後、沢村宗之進来る、川端少将殿江参

館、御同人大に卓識あることを聞く

六月朔日

大坂より書状来る、云、昨日朝陽船入津、図書殿
其外役々乗組むと

即日兵庫へ帰へる、御普請役来る、炮台築

造之人足怪我人有りし由、当人江金三両、湊

川・和田ヶ崎之人足江酒一樽宛、砂糖一樽宛を

遣す

(5) 潮田范三(播磨
明石藩用人)

(6) 沢村惣之丞か

○夜に入、矢田堀景藏⁽¹⁾来る、江戸の風聞、此度役

々上京之事を聞く、皆不分明、また聞く、図

書殿同行の内、歩兵一隊を英船御雇にて紀

州由良港迄来りし由、此処にて滞碇せしめ、

当地御軍艦順動・咸臨・蟠龍の三船迎として

昨日同所江到り、乗組せ大坂江到らしめたりと

云、何等の旨にて如斯や、弁すへからす

二日

大雨 兵庫に滞留

三日

大坂へ帰る

広井岩^(替)之助復讐、一昨日和泉山中村にて本

意を遂たる趣、佐藤・千屋より聞く、且此事

によつて、紀州家の事を執りし者江札状

并麁品を送り其労を謝す、広井生は

(1) のち鴻(軍艦奉
行並)

② 堺奉行江訴出たり、同所奉行へ糺済の上引渡
くれへき旨頼遣す

③ 堀宮内操練局・造艦局御用被 仰付旨達
書来る

○京師より何事も申来らず、図書殿の転末
不分明と聞く

四日

④ 大島生来る、対州より願たりし事共被 仰付る旨、
⑤ 対州侯之使者言上申聞ける、且小子対州行の
⑥ 命たり、其写同家へ御渡に成りし由を聞く
(銜カ)

○長崎の組頭田中哲輔来る

○水野正太夫来る、不慎の密話を申聞ける

○安井九兵衛来る、御普請二付、人足江渡す銭・手
形の事を申す

五日

(2) 島居忠善(五月
二十二日大坂町奉行
より堺奉行へ転任)

(3) 堀利孟(目付外
国掛)

(4) 大島友之允(対
馬藩士)

(5) 宗義達(対馬藩
主)

京師より如左御書付類、周防殿御渡の⁽¹⁾
趣にて御城代より来る

勝麟太郎江 覚

宗対馬守儀、今度帰国之節、昌光丸
御船器械・乗組役々共御貸渡之積相
達候間、対馬守より申談次第引渡候様
可被致候、尤対州表着候ハ、返納之筈相
達置候間、着帆之上は直ニ引戻候様可
被心得候事

、
、
、
、
、
覚

勝 麟太郎

対州表江為御用被差遣候間、支度

(1) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

出来次第出帆、朝鮮国之事情探索

いたし、委細可被申聞候事

覚

車付ハツテイラ五艘松平備前守拝借⁽²⁾

相願候ニ付、新規製造之上、御貸渡に

相成候旨、同人江相達置候間、早々出来

之上拝借被 仰付候積可被取計候事

覚

摂州神戸村江操練所・造艦局等御

取建相成候、付而は御軍艦取調役之内

式人、同下役之内式人、造船学相心

得候者一人、手伝大工二人宛同所江罷越

候積相心得、名前取調可被申聞候、且又

(2) 池田茂政(備前藩主)

御軍艦頭取之内一人、同教授方之内

両三人、一ヶ年交代之積ヲ以同所江

相詰、學術教導筋等厚く世話致

候様可被取計候、尤人選之上、名前可被

申聞候事

一、同所江蒸氣機械製造被 仰出候二付、

陸用蒸氣機関相心得候者一人、手伝

式人同所江相詰候積相心得、尤長崎表江

御取置相成候機関類御廻し相成候二付では、

長崎表ニおゐて右取扱方等相心得罷

在候者為御手伝罷越候様可被取計候事

覚

別紙之通、松平肥後守江相達候間、⁽¹⁾

得其意、為心得広瀬元恭江可被

(1) 松平容保(京都守護職 会津藩主)

達候事

此度八幡・山崎江関門修築被 仰付候

二付、御警衛十分相立候様可致、尤肥後守

家来之内へも右御用可被 仰付候間、名

前可書出旨被 仰付候二付、別紙ニ奉申上候、

以上

五月十一日

松平肥後守内

(2) 小野権之丞

別紙

(3) 野村左兵衛

右は軍事奉行相勤、長沼流兵道相学

候者二付、地形攻守之利害見込御用惣

括為相勤度奉存候

○松坂三内 (4)

右は長沼流相学候者二付、野村左兵衛江

(2) 会津藩公用方

(3) 会津藩公用方

(4) 会津藩公用方

手伝御用為相勤度奉存候

中沢帶刀⁽¹⁾

右は江川家西洋流相学候者二付、専修
築經營之御用為相勤度奉存候

右之外、役筋之者共重掛ニ致し、御用
為相勤度奉存候、人別之儀は追而申上候
様可仕候、以上

右差図

書面之者共、八幡・山崎江関門修築
相成候二付、申立之通右御用可申渡候、尤
勝麟太郎申談候様可仕候事

勝麟太郎江 覚

別紙之通相達候間、為心得相達候

(1) 会津藩大砲方
御雇勤

事

阿部主計頭家来⁽²⁾
安藤織馬

右、今度八幡・山崎江関門修築相成候二付、

右御用相勤候様可被申付候、委細之儀

は松平肥後守・勝麟太郎申談候様

可被致候

○去る四日、対州江被 仰渡候御書付、対州侯より

為心得相廻候

宗 対馬守

攘夷期限被 仰出、鎖港之及談判候二付

而は、外夷朝鮮国江渡来、屋宇を設

候間も有之候処、同国之儀は年来之

御信義も有之候間、為援助出張、外夷根

拠之策を破、時宜ニ寄兵威を以服

(2) 阿部正方(備後
福山藩主)

従可為致之处、元来兵食欠乏之国

柄二付、粮米等之儀厚申立之趣尤之

次第二も相聞候間、願之通粮米為御

手当米三万石宛年々三ヶ度ニ割合

被下候間、守戦之実備相立、国力を

尽し、

御国威海外ニ輝候様可被致候、万

一其効無之節は、改而御所置之品も

可有之候間、其旨可被相心得候、且又器

械・軍艦御貸渡之儀は、御聞届ニ相成

候得共、当時御数少之事故、御都合

次第追而可相達候、猶又惣而國中

取締向之義、願之通追々

公儀より御差図も可有之候へ共、松平⁽¹⁾

大膳^(マコ)太夫へも厚申談可被取計候、粮

(1) 毛利慶親(のち
敬親 長州藩主)

米請取方之儀は、御勘定奉行可被

談候

同人

今般在所江相越候二付、御軍艦一艘御貸

渡之義被相願候趣、無余儀筋二付、昌

光丸御船器械・乗組役々共御貸渡相

成候間、勝麟太郎申談、請取候様可被致候、

尤対州表着候ハ、早々返納之積

可被心得候

御軍艦奉行並

勝麟太郎

対州表江為御用被差遣候旨相

達候間、可被得其意候

右三通

今夕、乗船上京、これ天下之形勢、外夷なき
時は内患随て生すへし、危険廻らすへからず、
且別に密事を聞く、是等を言上せんと
す

六日 朝、伏見江着、同日直に

登城

聞く、⁽¹⁾図書殿淀に滞留、先日上京を留めん為

⁽²⁾竹本甲斐・津田⁽³⁾近江等大坂にて時勢を申

止めしか聞かれず、押て此処まで到られしに、

参政稻葉⁽⁴⁾殿出迎^(マ)ハられ、押留られしと云、

風聞に云、此度東士上京之挙は、開国を申

さむか為と、又云、京師を打か為と、此風説

京間に充つ、これは奸人あつて其機に乘し

風説せし也、其実は東上の輩大義に暗らく、

区々として開鎖を論し、内破の徴を起し、

(1) 小笠原長行(老
中格 肥前唐津藩世

子)

(2) 竹本正雅(大目
付・外国奉行)

(3) 津田正路(勘定

奉行)

(4) 稻葉正巳(若年
寄 安房館山藩主)

其間私論盛にして、自から死地に陥らしめ

らるゝを察せず、誠に歎息すへし

七日

登城

此夜、永井主水正を訪らふ、当時閉居、これは

先日姉小路殿を打ちしと云薩藩田中新兵衛

同人役所江呼出之処、忽ち自刃、此事口を

閉ちる為に、永井氏もあらかしめ知りて止め

さりしと云風説あるを以て、

御所より被 仰出閉門すと云、

同人江密議して云、図書殿淀に滞留せらる

ゝを以て、有志輩詰問之沙汰あり、官これを

見て制すること不能、一争を起して何の能か

ある、我行きて説解せんと決せり、若聞からざる

時は自から決意ありと云、同人も又同意、

(5) 永井尚志(京都町奉行)

(6) 志士 薩摩藩出身

此夜、大坂江御立寄の被 仰出あり、同人宅にて
此命を聞く、ゆへに淀行を止む

八日

登城

御帰途大坂江御立寄の命を承る、また今夕

御先江下阪すへき命あり、即刻退城、

伏見江出立

今日、土岐月堂⁽¹⁾に城中にて逢ふ

九日

大坂江着、松本良順⁽²⁾来る、長崎の話を聞く

夕刻、着御、登城

江戸にて当月三日西城炎上の告あり

十日

登城

昨、図書頭殿退役、当地御城代江御預と成る、聞く、⁽³⁾

(1) 土岐頼旨(もと大目付 海防掛)

(2) 将軍家茂の侍医

(3) 小笠原長行(六月九日老中格を罷免)

此挙東土京師に集まり開国を論し、

天朝を圧し大切に及ハむとする由、図書殿上京

前京師に遊説し密告する者あり（水府藩

梅田某と云）、また江戸にては、内破れを成さんと

する説あり、必らず奸者あつてこれ等を企た

てしか、東土これ等を察せず、烏合未熟の軽

卒を率ひて上阪し、果して其謀に乗つて進

退窮迫、議論一致せず、自から術中に陥入たる者

のことし、其拙可憐

十一日

登城

兵庫より咸臨船来る、矢田堀⁽⁵⁾へ面会

近日御船にて御帰東あらん歟内議あり、力^之を尽

くして決議を申

浅野伊賀・大久保豊後⁽⁶⁾に、形勢危迫累卵のことし、⁽⁷⁾

(4) 梅沢孫太郎（水戸藩士）

(5) 矢田堀景蔵（のち鴻軍艦奉行並）

(6) 浅野氏祐（神奈川奉行・外国奉行）

(7) 大久保忠恕（長崎奉行 六月十二日に大目付）

外寇恐るへからず、内患遁るへからすと云を密説す、同人皆同意

○聞、下の関にて長州之船艦米国の軍艦の為に

打沈められ、村落を焼打たると云

○大和の浪士乾十郎大義企の事あり、此義を

塾中紀藩の者江密告する者あり、坂本・新宮・

佐藤の三氏を遣し詰問せしむ

○夜八ツ時、咸臨船にて竹本甲斐・浅野伊賀・柴田

貞太郎帰東被 仰付ニ付、明十二日出帆可致との

書付到る

○江戸より鯉魚門船来る、酒井飛驒其他役々乗

組と云

十二日

今朝、咸臨船出帆、浅野・柴田の両子乗組

午後、御軍艦にて 御帰東被遊^出ニ付、御供可致

(1) 志士 大和国
宇智郡出身

(2) 坂本龍馬(志士
土佐藩出身 海舟門
下)

(3) 新宮馬之助(同
右)

(4) 佐藤与之助(軍
艦組出役 海舟門下)

(5) 柴田剛中(外国
奉行並)

(6) 酒井忠毗(若年
寄 若狭敦賀藩主)

の命あり

夕刻、諸船へ達す

十三日

今朝、順動船江

御乗船、四ツ時頃、大坂海出帆、夕刻、紀州雄良^(由)

港江御入津、御碇泊

十四日

同所出船、紀の大島江御入津、串本浦江

御登岸、無量寺にて御休息、夕刻御帰船、

此夜海上穏静月色明朗、御出帆可然と

申、直に御出帆

十五日

遠洋を斜に航す、四方^地を見す

十六日

払暁、品海江御着船、端舟にて浜御庭江

御上陸、御供、午後、御帰城、御供に候す

十七日

登城

関東の諸役大に儉安、他日に倍す、又諸説を

聞く、悉く大義に暗し、衆説紛々、勢者に雷^有

同し、機忌また甚たし、実に可歎々々

十八日

此日、御帰城之御祝儀として惣出仕

十九日 休

午前、大越⁽¹⁾を訪ふ、時勢切迫、有志之乏敷

を歎す

廿日

登城

御供之船々乗組の人員可書出旨、佐山八十次郎⁽²⁾

申聞ける

(1) 大久保越中守
(忠寛)の略称

(2) 奥祐筆組頭

廿一日 休

廿二日

登城

廿三日

操練局江出張、昨夜九州辺江出船可有之

旨、幡⁽³⁾因守殿より御達有之

廿四日

蟠龍船出航、外国之俗吏等并薩藩之喜入⁽⁴⁾

撰津乗組、薩摩江到る

廿五日 休

或人云、金川^(神奈川)に居住する米国之医師徳臣子ハ

頗る學術ある者也、其説に云、日本之

天子は將軍家と御中甚睦敷と、今外国と拒

絶成さんとする議あり、然るを幕之臣子是

を不然とし、其拒絶成さんとするの国の船艦を

薩州江英
船掛合と
して到る故、
此地よりも
役々御遣之
由にて船
す、
其事情は
生麦にて
島津三郎
帰府之由、
供連江入込
しといふを
以て、英人
切殺之事有
り、此議論
此方にて
不決ゆへに
英より直に
薩州江掛
合之為軍

(3) 諏訪忠誠(若年寄 信濃高島藩主)

(4) 喜入久高(薩摩藩家老)

(5) 島津久光(薩摩藩主父)

艦差向
ひたる故也

雇ひ、兵士を率ひて 天子を圧せんとするを
聞く、如斯之事若実ならば、これ骨肉に薄
くして外邦に厚し、其道理の当否を論せず
といへ共、我邦人などの絶てとらざる処也、日本
人これを可成とするやと、

此説は、先日図書頭殿歩兵を率ひて海路を
上京せられし二、船艦不足なるゆへ英船を雇ハ
れし折、其歩兵長等慢に放言して、

天朝を説得せんなど云し故、此説に及ひし由、
当今外邦頗る信義大道を解する者鮮から

す、率爾の言は是等の思ハむ処も辱かしからず
や

廿六日 登 城

大坂より俵次郎・半兵衛帰る、聞く、大坂の塾江
長藩五拾人程来たり、図書頭を打の企を

告げ、同志を募ると云、龍馬子はを説解し、

敢て同する者なし

廿七日 休 鳴嚙⁽¹⁾子来る

廿八日 登城

廿九日 登城

七月朔日 登城

二日

越中島江出張、千代田形水卸一見

三日 休

四日 休

对藩大島生⁽²⁾より来状、同人当月中旬ころ

出府、猶征韓之義を申さんと云

五日 登城

天下之形勢を本多伯耆⁽³⁾に談、同人頗る道

理を解し、時勢を愁ふの念深し、諸侯中

(1) 福田兵四郎(のち敬業 号鳴鷲 藩書調所御用掛)

(2) 大島友之允(对馬藩士)

(3) 本多正訥(学問所奉行 駿河田中藩主)

わづかに人ありといふへし

本日、有馬遠州閣老⁽¹⁾拜命

六日 休

七日 登城

八日 休

朝陽船下之関江可被遣旨命あり

九日 登城

薩州にて英艦と戦争ありし風説書を見る

十日 休

此夜、御軍艦一隻九州辺江出帆可為致旨

和泉守殿御書付来る⁽²⁾

十一日 登城

朝陽出船之義を取計、頃日風雨通船なく、

出船用意成難き旨を申す

松平石見江京摂間之形勢、乱髪書生之固志⁽³⁾

(1) 有馬道純(越前丸岡藩主 この日老中就任)

(2) 水野忠精(老中出羽山形藩主)

(3) 松平康直(外国奉行)

可愛ことを話す、同人大に時勢を歎す、また可談

十二日 休

十三日 登城

朝陽船出帆、連日之風烈に因て延日、猶勉強

して出船可致旨命あり、乗組江別段御手当被

下

十四日 出局

小船にて御台場近傍江到り、石炭積方を

指揮す

午後、木村⁽⁴⁾摂津江到り、出勤可有旨を勧む

十五日 登城

御用部屋にて、神戸造艦局御入用并浦賀表

石炭囲場、築地芸州之屋敷囲込等、且又

海軍興起之事を申す

十六日 休

(4) 木村喜毅(軍艦奉行)

十七日 登城

十八日 休

十九日 登城

廿日 休

廿一日 登城

木下⁽¹⁾謹吾同僚被 仰付、吉岡生金⁽²⁾川^(神奈川)支配江
転役

廿二日 休

土藩兩人来る、北地の談あり

廿三日 登城

水泳御改正并御軍艦局之事を河内殿・兵部殿⁽³⁾

江申す

廿四日 登城

局中組頭并神戸之局江人撰之事を申す

廿五日 休

(1) 木下利義(この日軍艦奉行並に就任)

(2) 吉岡勇平(軍艦取調役組頭 この日神奈川奉行支配定番役頭取取締へ就任)

(3) 井上正直(老中遠江浜松藩主)

(4) 稲葉正巳(若年寄 安房館山藩主)

廿六日 登城

一兩日前より周防殿出勤有之⁽⁵⁾

廿七日 休

廿八日 出局 寄合

廿九日 登城

周防殿江形勢を言上、頃日役人転撰、また旧復

之輩あり、議大に變す

晦日 休 大坂より愛之助⁽⁶⁾・亀弥太⁽⁷⁾帰る

八月朔日 登城

二日 休日

三日 出局

四日 休

五日 登城

六日 休

七日 休

(5) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

(6) 前河内愛之助
(沢村惣之丞の変名
志士 土佐藩出身)
(7) 望月亀弥太(土
佐藩士 海舟門下)

頃日薩英之事、外国新聞紙あり、訳に云、

薩藩逢接に到りしより殺氣あり、償金の談

に及び、薩之蒸氣船三隻を惣督之船に引寄す、

これは償金出さゝる時は、これを取らん為と云、

頃刻礮台より発炮、英艦死傷三十余名と、

府内礮台・造製舎等焼打と云

以上大略

○大坂之塾中より頃日来状、其形勢を云、内要

文数ヶ条云、

七月三日、昌光御船於対州表颶風之為破摧

仕候て、鈴木録之助殿初火焚害人、水夫害人溺死

候段、不慮之変事奉驚入候、尤外々は悉く無事

にて、昨廿四日塚本氏始として着坂仕候、尤御水夫

之内少々怪我等も御座候へ共、多分之事共相見へ

不申候、右は当日対州表碇泊にて、大体上陸仕居

(1) 佐藤与之助と
坂本龍馬

(2) 塚本桓輔(昌光
船頭取)

守衛として鈴木録之助・高山隼之助・近藤馬之助・

鈴木清三郎・森本幸作已上五士、外水夫・火焚

乗船罷在候所、遽ニ大風雨起り、両碇之縛并

纜共断折し波戸場江被吹寄、無余義船より

陸江飛上り候所、鈴木氏事誤て水中に墮入、船と

岩とに被圧迫落命、残念之事に御座候、尤当

日大風、在家商船破傷多く、樹木折倒夥

敷事之由、委細は右乗組より今日申上候筈、尤

颶風とは申なから、如是儀出来候ては、海軍

之衰微にも係り候半、天性令然処無抛長

歎仕候

○龍馬京都より帰阪仕候て同道仕、大隅守様江⁽³⁾

罷出、時勢之儀申上候、長州にて戦争之異船

横浜にて修補、且手負人等療養為致候

事にて、夷之手を借、薩長を打タしむると風評

(3) 松平信敏(大坂町奉行)

仕候事、既に攘夷之儀

勅答有之、未タ命令不行渡候故、誠義之徒は

奮激、奸佞者虚に乘し候て、人氣四分五

折之勢に到るの基ひ、且又

天朝にては、夷船に候へは英仏荷魯を不論^(蘭カ)

打払ひ候事、只夷を惡ミ天下に寇讎を拡

むるの理、然る時は終に

皇国衰微之兆、是を防くに術無らん、依之

内直を拳、枉を黜け、清潔の政を施し、

賞罪を明にし、又 朝廷よりは熟親仇讎^(悪カ)

を弁別して戦闘するの命非らすんは能ハす

候と申上置候、右等之義は愛之助より巨細可申

上候、依之只其縷を奉申上候

○今度摂海監察使として、四条殿⁽¹⁾・東園殿御下⁽²⁾

向有之旨趣粗承候処、四条殿は明石表、東

(1) 四条隆調(公家
国事寄人)

(2) 東園基敬(公家
国事寄人)

園殿は紀州加太浦御滞留にて、異船通行

次第無論に可打払との趣、左候へは弥前条申

上候仕合、乍恐 皇国浮沈之界不絶歎慨、

依之龍馬義近日明石江罷出、四条殿江拜謁

之上右等之段申上、戦闘に及候共有名実直に

仕度、尚又神戸は関西之海局と相定、

朝廷之令を以て人物御任撰、惣都督に据、彼

所にて芸術・人品悉く相撰、貴賤を論せず

登庸為致候ハ、、 皇国之人物爰に集ひ、撰

海及四隅之防禦嚴革に行届可申、入費之

儀は関西之諸侯より償ひ候事に

勅命下たり、また東武之海局は関東之局

とし候て、 皇国之武威爰に盛に相成候半と

右一々建白仕、若御許容之体も候ハ、、直に越

州江立越候て、江戸へ出府可仕、此義大隅守様

へも申上候

○朝陽船、当廿三日朝淡州松尾岬^(帆)辺通航仕

候処、同所砲台より発炮、舵之辺江弾着、乍去

破傷いたし候程之義には無之候由、依ては御船々

深夜薄暮といへ共分明に相知れ候様、標的

に而も御用ひ無之候ては、不虞之危^(ママ)儉に罹

候事も難計と奉存候

○先達て昌光船三田尻江碇泊之砌、同処

詰役人より上陸断有之、当所砲台守衛之士

は難制候間、若上陸も候ハ、警固之士差添

可申と申出候由、是等も横港にて異船修覆

之事々に係り候事と奉愚察候

○天保山砲台は、再度因州にて警衛有之候

様 朝廷より御内命有之候事にて、大炮数

挺鑄造いたし嚴重に相備候事、尤異船近

付次第打摧可仕と夫々用意仕居候

○兵庫・川岬両所砲台之儀、打杭之梁も碌々居

ハリ不申、漸く中之井に取掛り居候由、存外果敢^{はか}

取不申、此体にては当年中ニ落成如何無覚

束候、大工などに承り候へは、此節雨天勝にて休

日多く故と申聞候へとも、兎角職夫を醜酷

に指役^{ママ}し、諸費吝嗇之故とも相聞候、近日

大隅守様も同所御見廻有之候との事、其節

御供仕、否探索仕度奉存候

○明石砲台は、石も余程寄り、追々抄取候体

に御座候、今度監察使御下向ニ付、白砲台より

発炮之用意頻に御座候由、以上

○七月 御所より列藩江被 仰出

海岸防禦之儀、度々

御沙汰之处、往々不備之聞有之候ニ付、今度

紀州加田浦・播州明石浦等江被立監察

使候、是迄傍觀畏縮之藩有之趣二候、自

後右様之輩有之候得は、岐度^(略カ)

御沙汰、被召上官位候、列藩も其心得

可有之

御沙汰之事

七月

別紙之通被

仰出候、在国御一列不洩様早々御伝達

可有之候、仍而申入候也

七月廿四日

定⁽¹⁾ 功
雅⁽²⁾ 典

松平相模守⁽³⁾ 松平淡路守⁽⁴⁾ 上杉弾正⁽⁵⁾

大弼⁽⁶⁾ 松平備前守殿

八日

登城 夫より操練局寄合出席

(1) 野宮定功(公家
武家伝奏)
(2) 飛鳥井雅典(公
家 武家伝奏)
(3) 池田慶徳(因州
藩主)
(4) 蜂須賀(松平)
齊裕(阿波徳島藩主)
(5) 上杉齊憲(出羽
米沢藩主)
(6) 池田茂政(備前
藩主)

鎖港之事
は
御受ありし
事甚不宜、
其頃頻に
言上せしか
勢無止事
爰に到り
しなり、実
は御難題
千万な
れとも、
御受後ハ
更ニ御所
置なく、
外邦人に
一、二応御
談判、其上
にて出来
すへからさる
の形勢
言上より
は更に無
手段歟

本日、周防殿江形勢言上、大意は当時

拒絶之御受京都にて有之、未夕一応之御談

判にも不及、鎖港及難しと言上有之候ハ、

百事皆虚偽と相成甚タ不可ならん、一応

再応も御手を被為尽、其後事実無御腹

臆少も御取飾なく被 仰立候義、尤当然

哉と奉存候、幕吏皆不同意、甚敷は引籠

敢て登城無之者閣老・参政より已下甚

多し、これ如何之事哉、御手を被為尽

すしては兎も角も仰訳られ立かたらんと

(筋也)
と申す

九日 休

昨朝、大島友之允着府之由にて来訪、京撰

之形勢を聞く

聞く、越之春嶽殿上京して開国之義言上に

(7) 対馬藩士

(8) 松平春嶽(慶永
越前藩前藩主)

及ふといふ説京間に甚敷、書生輩これを憤り、其旅館と成るへき家屋を焼くと云

十日 登 城

此日、御黒書院にて 御目見、但詰合・布衣
以上御役人、御直に 仰あり

不遠鎖港之御談判相成候間、面々決心勉
勵可致旨なり

十一日 登 城

此日、御供并御留守之面々 御目見、
上意あり

今日、大坂松平大隅より来翰、云、

扱今般坂本龍馬大義を論し、越公⁽¹⁾も上京
之積、然る処宿所高台寺を被焼、遅行

難計、且気力少きを憂ひ云々と云、

又云、神戸村海局之義二付、早々上阪有之候様

(1) 松平茂昭(越前藩主)

いたし度、然らされは大ニ不都合云々、

大坂も滅亡近きにあらん、歎息と云

十二日 休

朝陽船先頃下之関に到りしか、長藩より

拝借之義を云々聞く、また聞、御目付助等切

腹せんとせし由、何等之訳哉更に不分明、小倉

藩替りて兩人自刃せしと云

○或人、一橋中納言殿⁽²⁾再度後見御職辞表

を示す、爰に記す

頓首再拝啓白

慶喜

殿下不知慶喜之不省^(ママ)、過而可用者と被思召

天下重任後見職被為 命、日夜自省仕候て

不堪惶恐候^(ママ)、抑当今攘夷不可行形勢は熟知

仕候得共、

天機一発、綸言如汗、開鎖之利害今又不可再

(2) 一橋慶喜(將軍
後見職)

陳、武臣之職を尽し一死を期して及東帰候処、
奸説紛々、意外之大嫌疑を生し、百事不可成
形勢二付、去ル五月中当職御免奉願候処、
出格之 天恩を以而辭職御差留被 仰出、
攘夷成功可仕旨謹而奉畏候、然る処本月
十三日御請書申上候通、攘夷期限有之候ては
一策も無之、期限も無之、私見込之通被 仰出候ハ、
御請申上出勤可仕旨言上申上候処、此程薩
長二藩所置二付、御国体大ニ関係仕候大事
件出来、傍觀難仕候間、引中之身分恐入候
得共、閣老・有司と相議候事御座候処、意
見一切行れ不申候、ケ様之体ニ御座候処、仮令
攘夷之期限無之、見込之通被 仰出候共、難及
儀分明ニ御座候、如斯此体にて洋夷と万一
戦争仕候時は、必敗無疑、敗軍仕候時は

皇国之御恥辱無此上奉存候、浅智微力之
私輩、此行末中々忠勤仕遂見込無之候間、
攘夷期限之有無二不拘辞職奉願候、尤其
段幕府江委細申立候義二御座候、無量之
天恩不堪感荷、幕府之盛願又忘却

不仕事勿論二候得共、言不被用謀不被行、徒
然此職二罷在候ハ、曠職之罪天人之責一身
に迫り候事故、断然辞職奉願候、臨紙涕泣
不知所陳、伏而御諒察奉願候、誠惶誠恐
頓首々々

六月廿四日

慶喜

殿⁽¹⁾
下

○七月四日被 仰出

一橋中納言

(1) 鷹司輔熙(関白)

攘夷之周旋不行届二付、後見再応辞表

言上之趣達

叡聞、無余義筋二被 思召候得共、攘夷之

儀は先年来

叡慮御一定、たとへ 皇国焦土二相成候共、

聊不被為厭、醜夷と鑒戦、 祖宗江之御

申訳被遊度御赤心より被 思召立候事

ニ而、右已来日夜寢膳を被廢、天地神明

江御祈誓之上被 仰出候義ニ有之、武臣之

職掌速に膺懲之奇策を施し、可奉安

宸憂筋二候処、幕府ニ於て度々御請被申立

候得共、兎角決心如何と被 思召候儀有之、

期限を以而被 仰出候次第に候得共、今更内

政不相整、人心一和無之旨を以而彼是猶予

に及候様にては、折格(マコ) 徳川家御扶助之

御盛意ニ相戾り、畢竟天下動乱之端を

開らき、不容易形勢ニ到可申候間、一時嫌

疑之場合、御垂憐被遊候得共、

皇国之為尽粉骨、大勢致挽回候様可致

丹精、依之再度之辞表被 召止候旨被

仰出候事

七月

○七月十五日 禁裏附小栗下総⁽¹⁾

御使、関東江被下候 御書

大樹数百年之興廃典上洛有之、万事

恭順、君臣名義改正儀は、深

慮候処、去九日賜暇下阪有之候、已

前奏聞之件々始末不分明、殊ニ蒸気

船ニ而遽帰府、第一攘夷期限之義

於而不都合之次第非一候間、屹度御糺

(1) 小栗政寧

可有之候得共、深

思召有之候間、追而可被渡御沙汰候

事

○此頃 鳳輦東下、親征を申勧る者

あり、依之京間異説紛々たり、因州侯建

言あり、左に記す

御親征之義段々蒙 御下問、誠ニ諸有志之

議論盛ニ御座候得共、被進

鳳輦候義は実以不容易次第にして、且は名

と実と不相叶候節は、実以天下億兆之心を

御失可被遊と奉存候、

大樹⁽²⁾既ニ帰城之上は、於攘夷之事可有憤発

之機会ニ候得共、此猶又寛大之

叡慮を以而、攘夷基本之 詔ヲ下され、其詔ニ云、

攘夷之事、 大樹於禁内度々御請有之、

(1) 池田慶徳(因州藩主)

(2) 將軍の唐名

天意も御直ニ被 仰候事故、今更不可廢閣(ママ)は

必然ニ候、但五月十日之期限既ニ過去り、其実事

於今行ハれず、乍去京江遠隔、不速故にも

可有之、然ニ帰城既ニ数日を経、西のあたり政

事を被聞、当此時攘夷之機会不可失、仍テ

大樹始メ東海守衛諸藩之功劣為奏上

觀察使(ママ)を被下、且及其期為応援親兵精

撰之輩を添被下、上は依時義交戦すへき旨ニ而

既に節刀を賜り、東行之勅方に下らんとす、

既に東行せは大樹共に力を合せ心を一にして

夷虜を可掃攘也、万も無差支事ニは

思召候得共、幕府上下之意如何、速に可奏

聞有之旨を以て被 仰下、幕府御請申上

候上は、即時に觀察使を御下たし可被遊、

万一其時に当て、幕府之吏

天使之命を用ひす攘夷之心無之候ハ、乃公卿方及列藩ニ 詔有之、其罪を御正被 遊、其期に至ては臨機応変之御所置可被為在候、総而内治とハすして外夷威腹する道理無之候得は、諸事鄭重之御処置、微臣之偏に所 仰願候

七月

十三日 登城 廻局

本日、御役替廿五名、任免十八名なりと云
対州難船之乗組昨夜着、面会

夜に入り、周防守殿御書取、豊後守相渡⁽¹⁾
候趣にて、局より来る、云

勝麟太郎⁽²⁾
木下謹吾 江

覚

(1) 大久保忠恕(大目付)か

(2) 木下利義(軍艦奉行並)

|||||、
|||||、

海陸御備向御用取扱可申候事

十四日 休

此日、松平⁽³⁾備後守御軍艦奉行被 仰付候由、

御殿同僚より申越候事

十五日 登城

此日、中納言殿・周防殿并海陸御備掛、目付

杉浦正一郎・設楽岩次郎・佐々木脩輔・池田⁽⁶⁾

修理、川勝丹波守、阿部⁽⁸⁾、^(ママ)、佐々木信濃、⁽⁹⁾

神保⁽¹⁰⁾伯耆、溝口伊勢、小子等にて防禦之議⁽¹¹⁾

あり、大低空論、小子云、戦争之事予メ議

すへからず、接待之事測るへからず、吾人今日より

一戦すへきも知るへからず、機事密ならされは

害成る、兵は拙速を貴ふ、深く量り遠

(3) 松平乘原

(4) 一橋慶喜(將軍
後見職)

(5) 板倉勝靜(老中
備中松山藩主)

(6) 池田長発

(7) 川勝広運(八月
十四日勘定奉行より
陸軍奉行並に転任)

(8) 阿部正外(町奉
行)か

(9) 佐々木頭発(町
奉行)

(10) 神保長興(騎兵
奉行)

(11) 溝口勝如(歩兵
奉行)

く量るに過ぎなハ必敗ならん、もとより勝

算なし、無御扱処より鎖港之議興る、唯

上下死の覚悟簡要ならんと云

十六日 登城

此日、海陸警衛之議あり、皆空論、絶て武

事を談すへき者なし、我か議皆暴

戻を以て目す

○松平備後同僚被 仰付二付、頭取已下一等

御軍艦組、書を出して退役を乞ふ、其大

意は、御場^所□盛大に御世話可有処、海軍

之事を^{ママ}不解さる奉行命せられなは、又旧弊

興つて尽力の甲斐^{なし}云々杯云々

十七日 登城

此日、富津之洲築出之議あり、これは水

府藩士之説と云、周防殿ニ乞ふて、同藩竹^{(一)(武)}

(1) 水戸藩執政

田耕雲齋已下に目会^面、皆決論なし

○頭取已下江一書を送くり、出務なきは別に意ありや如何と云、其書に云

武臣武事を相忘れ、遊惰因循に相流れ、

兵備御充実なし難きは、

上議皆是を明に知るといへ共、無御扱御場合

にて、鎖港御談判御決定ニ相成、既ニ

上様御直に決心勉励可致旨被 仰出

候上は、臣子之職宜敷精力を尽し、一死

を以て多年之御高恩に報可申は必然

也、殊ニ御軍艦は其用甚多く、各必死

を以て戦闘之議あるへき所、此御場合に

到り、他事を以て御役御免被 相願、或

は病氣引にて出勤無之は、何共

道理不可解、愚拙狐疑甚敷候、若

不省^{ママ}命令する処各意に不応候故哉、

私怨を以て御大切之場合故障被致

候は、何共恐入候次第、可申立義は御申立、

御大切ニ臨候折柄、御奉公筋は其筋相

立候様有之は勿論と存候、昨今同役

悉く病氣引にて、不省^{ママ}一人大事を決

議するに不絶、且頭取已下悉く書付

被差出勤務無之、今に到候て如何とも

愚慮に不及、若不省^{ママ}一人大事を決する

故を以て、如斯切迫之御場合、大切之御

軍艦に故障有之候ては、

上江奉対恐入候次第に候間、否之趣意

今一応承度、其上にて不省^{ママ}早々退役可

致と決心いたし候、各散居、一々面調を

勞せず、一紙を以て決答を相待候、以上

○明日晴雨共、中納言殿・閤老初品川

御台場御一見之旨、拙も御供たるへき旨

也

十八日

此日、御殿山下炮台より品川海岸并御船越中

島江出張、中納言殿・閤老・諸役同船、

警衛之事を申す、御殿山に堡塞を築き、品海

より内江入る湊筋□礁を造るへしと云、其外警

衛・兵備之事を申す

十九日 登城

天子御親征あるへきの風評を聞く

警衛之議あり、云、拙兵事を不解諸君之高

論聞くに堪へず、夫兵は拙速を貴ひ機事

不密害生、空論時日を消すは僕か欲せざる

処なり、決て議にあつかるへからすと云

○此夜、大島⁽¹⁾生来る、西国之形勢を聞く、云、中川⁽²⁾親王

小倉征伐之議あり、九州辺御下向之風評あり、又

天朝御親征、春日・伊勢江

鳳輦を被為進へき趣を聞く

対州侯より貌皮并興正之一刀を送らる⁽³⁾

廿日 登城

周防殿江形勢を申す

廿一日 登城

此日、長州より帰れる御目付助に逢ふ、朝陽船

押て長州より拝借すと云、形勢戦争之風

あり、東士大に恐怖し、論するに足らす

○此夜、因・備・阿井上杉氏^{之三藩}関東下向之

勅命を蒙り、廿四日京師発足すと云、

これは攘夷遅滞之御再責、時宜により関東

征討の先陣なりと云

(1) 大島友之允(対馬藩士)

(2) 中川宮(八月二十七日朝彦の諱を賜る)

(3) 宗義達(対馬藩主)

廿二日 登城

此頃、日々海陸警衛之議あり、皆武事を知らざるの輩、唯空論消時日而已

廿三日 登城

聞く、京師にて薩主として、上杉・諸司代憤発会津・(4)(マ)

し、国事掛之公卿を廃止し、長藩を追ふと

云、嗚呼一雄倒れは一雄起る、真に乱世の姿

勢、朝威・幕威共に落地、此時に当て

將軍輕装にて 上洛し、赤心誠実を以て

天朝を警衛、天下之大道を説き、旧弊を改

め、坂城に留止、天下誠実一片の赤心を以

て御遵奉し奉らは、孰か間然する者あらん

や、密に此議周防殿に申す

廿四日 登城

聞く、大和之県令鈴木某群党之為に被殺(6)

(4) 上杉齊憲(出羽米沢藩主)
(5) 稻葉正邦(京都所司代 山城淀藩主)

(6) 鈴木源内(大和五条代官)

陣屋を焼払はれたりと、其党貳百人計某寺⁽¹⁾

により村長に令して、地税是等^迄の半を免るし

たりと云

廿五日 登城

將軍再御上洛、先閣老先に御上京あるへき

よし申す、雅楽頭殿軍艦にて御上京之儀⁽²⁾

被仰出る ○此頃、為國家に建議必死を極

め、有司を説き弱者を罵る、終に得罪之

階梯たらんを思ハさるにあらすといへ共、愚者謗

議百事、因循皆機会を失するを憤とり^(マコ)

且災蕭牆に起らん□不察輩すこしく^{とす、若不明之}

自得するあれは、豈裨益少々ならん哉^{に到れ}

廿六日 登城

空議消時日

廿七日 登城

(1) 桜井寺(大和国
宇智郡)

(2) 酒井忠績(老中
播磨姫路藩主)

摂家之私領大和の県令持と同断之風聞を云

廿八日 登城

瑣港談判応接せんといふ者なし、議論紛々、夜に入つて退城

大島生来る、此夜長州之便あり、朝陽船世評とは相反し、大膳⁽³⁾太夫^(ママ)厚く御直書を受取、使を饗応する由、同藩より告ありと云

廿九日 登城

昨夜、雅楽頭殿へ倍^(ママ)し御船にて上阪すへき命あり、河内守殿御達⁽⁴⁾、御手当・御服替として金百両被下候趣、今夜河内殿より御書付渡る

昨夜中納言殿・閣老へ申て云、当今之形勢実に累卵之危あり、幕府是迄虚飾名分之御所置を御打捨、一片御誠実を以て、上

(3) 毛利慶親(のち敬親 長州藩主)

(4) 井上正直(老中 遠江浜松藩主)

天朝に對し奉り、下万民に被對候ハ、御取失

の信を御国内に布かむ、其上將軍家御上洛

各国之侯伯諸藩誠実の輩と共、御国家

の大事を御一定被遊なは、希くハ

皇国興起之基を成さん歟、幕吏は宇

内之形勢は申までもなく、皇国大義の存する

処を知らざる者甚多し、唯一家の私論紛々

たり、能く形勢と虚実を明らかにして、御誠実

にあらされは御万解挽回なからん、今天下瓦解之

兵力を動かさる者は、名士見る所ある歟云々

○此夜、明昨朝周防守殿江参上すべきよし、御

同人家来より申越す

本日、不遠 御上洛可被遊

御思召之由、諸司士に御告あり

晦日

(1) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

樋口謙之允⁽²⁾来る、云、京師之紛擾は

中川親王攘夷之惣督として西国御下向

之御 参内有之处、御退内後俄に

御 説変せしより起りしと云

○周防殿江参上、京師其他の事情、且鎖港

御談判之可否を申す

○午後、順動船乗組、雅楽頭殿并大監察渡⁽³⁾

辺肥後守、監察戸川鉾三郎・高力直三郎、⁽⁴⁾⁽⁵⁾

禁裏附小栗下総守、奥御祐筆小野田吉次郎・⁽⁶⁾

斎藤錠三郎、其他は酒井殿御家来等

夕刻、閣老板倉より文通、明日出帆延引可然旨

申来る、大小監察夜に入登城

九月朔日

昨日之議不終、出帆延引、大低空論之由

二日

(2) 対馬藩士

(3) 渡辺孝綱(大目付)

(4) 戸川安愛(目付)

(5) 高力忠長(目付)

(6) 小栗政寧

出帆、浦賀前にて機関損所有之、修復、夜に出船

三日 遠洋を航する時大西風、針路を鳥羽之安乗

港にとり入津、碇泊

四日 同所出帆、紀之大島に碇

五日 風順宜からず、碇

六日

七日

八日 紀之 (マ) へ碇、紀家通船を断る

九日 暁、天保山沖江入津、同日雅楽頭殿初役々上陸、
専修寺旅宿へ入る

○此夜、雅楽頭殿使あり、明暁上京、唯今可来

と也、即刻参上拝謁、密議あり、云、此度之御

上京、船内にて申上候如く、唯々京師之事変

御尋問を主とし、上の御英意御誠実に相貫

き候^{にて}まで足り可申、兼て関東にて御議有之し鎖港

延日之事は、臨機応変可然歟、既に是等之為

御上京と申事は、関東より内通ありしも知るへからず、

図書頭⁽¹⁾か轍を踏むは尤不明之至なり、如此ならば

大使之御任間然することなからん、唯々御取繕^(ママ)なく

方尤御誠実の旨に叶はん歟と、且聞ける所の時

情風説を申す

十日

順動兵庫へ廻し、御修復之ことを荒井⁽²⁾に伝ふ

○午後、町奉行へ行く、江戸の形勢内話 ○薩人御船

拝借之義ニ付野村生来訪、同人江郁之助への書翰

相渡し、早速出帆可然と云

十一日

薩人野村雄之助来る、今夕兵庫より急便あり、順

動船内にて、稽古人田中万歳誤て手銃之為に死

(1) 小笠原長行(六月九日老中格を罷免)

(2) 荒井郁之助(軍艦頭取)

せりと聞く

十二日

十三日 陸路を西宮江行く、同所一泊

十四日

今津・西之宮炮台御普請場一見、鈴木大之進を

訪ふ、同道 ○矢口浩一郎か旅宿に到り、時勢を談

す ○今夕、西之宮一泊

十五日

出立、神戸に到り、操練局并屋敷を見る、午後湊川

炮台場并和田ヶ崎之炮台場一見、夫々指揮す、

兵庫細屋三太夫方一泊す

十六日 雨休

肥後藩并越前藩来る、云、細川之両公子龍之助・

雅楽之助近々上京、既に出途と聞く、これ春嶽・

容堂・三郎・筑前之諸君と通議し、天下改復之

(1) のち重嶺(勘定吟味役)

(2) 矢口正浩(勘定方)

(3) 長岡良之助(のち護美 肥後藩主細川慶順の弟)か

(4) 長岡澄之助(同右のち細川護久か)

(5) 松平春嶽(慶永越前藩前藩主)

(6) 山内容堂(豊信土佐藩前藩主)

(7) 島津久光(薩摩藩主父)

(8) 黒田長溥(筑前藩主)

義を以て尽力し、興国一致更張之政に改革せん

為也、此義我輩積年之微衷、春嶽公これか主と

なり、使臣を四方に出たし説得弁明ありしか、今まさに

此好機会となれり、希くは関東因循之弊なく

速に

大樹御上洛、諸侯に会し、誠実高明之卓識

を上

天朝之叡聞に達し、下群吏下民に布告し給ハ、

百事万解、皇国更張之威遠く海外に及ハん、

唯恐る、関東之俗吏輩、天下之形勢を不察、旧弊

を固執して移らざるを、愚拙輩痛憤に堪へ

ざる所以也 ○又聞く、三条殿長府江下られし後、

細川家へ坊官某を遣し云、近々義兵を挙げ、

宜敷助勢を頼むと、細川家其答なし、国論必ら

す取合ハざるへしと云

(9) 三条実美(公家
八月十八日政変で長
州へ下る)
(10) 丹羽正雄(三条
家臣)

十七日

⁽¹⁾有馬出雲兵庫へ来る之由告あり、ゆへに滞留す

十八日

有馬氏和田ヶ崎へ来る、同道、小炮台を設くる地所を見る、聞く、雅楽頭殿十六日俄に御帰東ありしと、其善悪不可知、又聞く、大和之蜂起へ加州・土州・筑前家江討手として可向旨 御所より被 仰付、加州家は一昨日大坂へ下たりしと云、他は不受命、其家老并主家の沙汰を待と云

十九日

帰阪 ○京師之形勢を聞くに、会・薩事を執り御三家また建議あり、大坂城は紀家入城守衛あるの由、尾家は京師に在り、水家は江戸を助く、共に鎖港を口実とし関東を圧す、長州家は 御所より御沙汰にて、其藩士入京を不

(1) 有馬則篤(大坂町奉行)

余田三右衛門
兼坂熊四郎

免、既に先月十八日之事ありし後、国元より家老根来⁽²⁾上総なる者上坂し、歎願筋ありしといへ共、入京不叶、今に滞坂すと云

○一昨日芸州⁽³⁾之世子其国蒸気船にて着坂、上京

○因藩廿二人、一味同心して其家長大夫を討ちし者

等、罪を蒙らす、皆伏見之屋敷へ引取しと聞く、此中

我門生両三輩あり⁽⁴⁾

同侯建言あり、云、大和之蜂起は討手を御止め、先⁽⁵⁾

御理解あらは、必らす事に臨御用立の折あらん、又長

州之御所置は、当今之御所置不可然、あなち朝敵とも

難申、宜敷寛大之御許容あらん歟、又奔走せし公卿^(御旨趣にて其いふ所)

方は一と先御呼返可然、なとのことなりと云

廿日

細川藩二人門入、云、長崎より薩藩高崎伊太郎^{(8) (猪)}

外一人魯国之船に便して彼邦に到り、炮器買入と

(2) 根来勢之祐(長州藩家老)

(3) 浅野茂勲(芸州藩世子)

(4) 本圀寺事件に参加した海舟門下に、吉田直人・吉岡平之進・山口謙之進・加須屋右馬允・中井範五郎の五名がいる

(5) 池田慶徳(因州藩主)

(6) 肥後藩士 楠井小楠門下

(7) (6) に同じ

(8) のち五六(薩摩藩士)

云ふ ○又聞く、当夏頃、長府之家老^(ママ) 何事

にや建議切実なりしか、其藩に不被聞、萩に到り

て建白また誠実、これもまた不被用、終に妻

子共に府を追れ、今博多に流浪すと、如斯故

長藩もまた内破空論一定せざる可事と

○午後西町奉行江到る、聞く、加州之兵先日下向⁽¹⁾

せし者、今日帰京すと云、是はその已前大和蜂

起中より反告せし者あり、其者云、長州之兵金

剛山に來り応援之策ありと、公卿方これを聞

かれ恐怖して、土・肥・加へ令し兵を出さしむ、然るに

此こと無根の空言なりしゆへ、帰京せしめたりと云、

當時之 朝令大低如此、唯歎す、

朝威自から軽く、終に応令する者なきに到らん

歟

廿一日

(1) 大坂西町奉行
(この時は松平信敏)

桂か説ニ云、
当時鎖港
攘夷之事、
激徒といへ
共、出来さ
るを知る、唯
是を口実
として国内
之動揺を

会藩中沢帯刀来る、八幡・山崎関門之地理を

定む ○聞く、雅楽頭殿帰東ありしは、穩密の^(ママ)

朝令且会侯之議ありしゆへにて、其事談すへからず⁽²⁾

といへ共、恐らく 大樹御 上洛の事歟、

又云、大和鷹取へ会藩兩人褒詞の御使として下^(高)

たり、夫より群山を経て和州探索に到りしに、群^(郡)

山の藩士五・六拾人無法に取掛り、終に炮殺せしめ

たりと、其一人は関門修築のことを司とる⁽³⁾

者にて、兵術に通達し、且要路に当たりし人

なり、可歎々々

桂小五郎来る、密話数刻、其困苦を話し、且近日⁽⁴⁾

差出せし草稿を示す、云、

宰相父子、積年⁽⁵⁾

叡慮御貫徹不仕を憂ひ、何卒一日も早く

叡旨御貫徹、御国是御一定仕候へかしと而已

(2) 松平容保(京都守護職 会津藩主)

(3) 松坂三内(会津藩士)

(4) 長州藩士の
ちの木戸孝允

(5) 毛利慶親(のち
敬親 長州藩主)

促し、風雲
の会に乗
せんとす、是
を庄す
る者なし云々

存詰、去年来申合せ西馳東奔仕、当春宰

相事御暇相願帰国、弊政改革・武備一途

に励精、⁽¹⁾長門守事は滞京、

大樹公御上 洛相待、

皇威恢張・夷狄拒絶之策献言仕、長門守

義帰国、

大樹公

叡旨御請ニ相成候攘夷期限に到り候ては、

夷艦及掃攘、其後度々及戦争候へ共、元より

微力独任、果々^(はかばかしき)敷膺懲之実効も不相

立、

叡旨万分之一も不奉酬深奉恐入候、乍去此上ハ

於

幕府御正議^(マツ)弥相貫き、列藩も一致

に相成、 神州挙而

(1) 毛利定広(のち
広封・元徳 長州藩
世子)

勸旨を遵奉仕、於于此御貫徹可仕と

奉存候処、豈不図、隣國小倉におゐては、
更に掃攘に不及のミならず、襲来致し候
節も、彼地へは上陸致し、或は彼方繫船
と夷艦纜を結び、長州へ向け数度発炮候
二付、長州国中之人民、尚逐々諸藩より馬
関へ向け来り居候有志之面々憤懣に堪へ
兼、已に小倉へ向け違

勅之罪を可糺との義申張、數千人之人数挙
而及渡海掛候事も一度ならず、前条之次第二
付、夷艦為掃攘不得止彼海岸へ相渡候者
は無是非勢に候へ共、宰相父子自ら漸々難
忍を忍ハせ取押居候て、只々

勸旨御貫徹仕候様之御沙汰を只管奉待候
之処、於

幕府如何之御評議に御座候哉、小倉へ向け

掃攘之御催促無之、却而对小倉、長州之為

近国諸侯方へ援兵之御内意有之歟之由

伝承仕、国中之憤懣、宰相父子之手敷

にも任せぬ位之事にて、父子共深く痛心仕、

実二

叡旨之御貫徹不仕を慨歎仕居候、

叡旨御貫徹仕候様、乍不及必死尽力仕候へ

は、因循之徒には相触れ、其れを厭ひ候而は、

叡旨御貫徹御国是御一定之目途無之

不得止次第にて、因循之徒よりは敵視せられ

候とも、只々

叡旨之難有を以て今日まで尽力仕居候処、十八日

已後之形勢にては、前条之次第二付、いか様無

実之讒説を受け候歟も難計、全体

御親征之義、臣道を以て申上候時は、天下之

諸侯尽き果候の上可奉建言筈に御座候へ共、

兼て

御親征 御宸断被為 遊候御事は、昨年

中山大納言殿より宰相父子奉承知、⁽¹⁾

神州之御武威御更張被為遊度、從來之

勸旨奉窺候事ニ付、是非

神州一致

勸旨を遵奉不仕候ては不相叶、然処

今日天下之形勢、小倉を以て御覧被為成

候通、

神州一致と申所目途無之、乍然一致不仕節

は、現然彼之術中に陥り、

神州之御大恥辱必然之御事ニ付、不得止

兼而

(1) 中山忠能(公家
国事御用掛)

御宸断被為在候

御親征之御時節、則御時と奉存、乍恐

主上一度 石清水へ 行幸、攘夷之 御指揮

被為在候へは、 神州之者一人として

叡旨遵奉不仕者は有之間敷、到于此

神州必一致可仕と奉存、宰相父子只々

御親征之御時を奉建言、 石清水迄之

行幸奉歎願候事にて、此義は

殿下御存被遊候御事と奉存候、左候へは於

幕府も御正議は必相貫き、
(ママ)

大樹公之御職分も訖度相立候御事と奉存候、
(ママ)

然処、 神州一致

叡旨を遵奉仕度志願も、却而分裂之端

と相成、 国家身命を抛ち

天恩万分に奉報度寸誠も灰燼と相成、今日

之形勢に立到り候段、痛哭血泣に不堪奉

存候、実に於馬関も、父を失ひ或は子を失ひ、

只管

勸旨之難有を以て数度及決戦候折柄、纔に

咫尺之海を隔て夷艦と纜を結び、或は上陸

致させ薪水まで取り候内聞、一国の憤懣不

容易上、宰相父子千辛万苦、尊

王攘夷之大義相立候様積年微忠を尽し、

殊に昨年難有も蒙

天勅候已来は、帰国已後も雨に浴し風に梳し

未十日と一所に安居仕候事無之、國中単騎

同様にて奔走、

勸旨之難有を諭し、且々及攘夷候心底、無故

不忠不義同様之疑を受候義、実ニ於臣子

難忍至情

神州之御為深く奉恐入候ニ付、宰相父子精々

鎮撫可仕候へ共、国元之義いかにも掛念仕候ニ付、

私儀暫滯京鎮撫仕候様、御内意奉拝承

候へ共、一先帰国仕候ニ付、此段乍恐御憐察

奉願上候、

又、小倉之義申出候事、実に心外至極に御座候へ

共、自然と夷狄を引候形様に被相窺、国中

之憤懣不容易、是なりにて打流れ候ては、

内地四分五裂、決而再不可収形勢ニ立

至り、実に

神州御一大事と奉存、不得止本文申陳候

通、兼而

御宸断被為在ニ付御時を奉建言、元より

宰相父子ニおゐては、昨年来難有も

奉蒙

寵遇、於于此因循に打過候而は誠に以て

奉恐入候儀ニ付、只々自分当至難

天恩万一に奉酬候心得にて及于此、必竟

は天下一致ニ無之ては不相濟儀と存詰

居候処、不得止今度建言仕候事小倉

より起り候事ニ付、無是非爰に小倉を

不申出候而は、元来之趣意難相分次第

ニ付、御諒察奉願候事

同人云、先日水府之大場一心齋(1)に面会、純乎と

して攘夷之事を云、必らず関東にて建言せんと、

此人之歌あり、云、

あすき弓 とるものゝ夫の真こゝろハ 大和の

道をしる人そしる

○三条中納言実美退京之時述懷

さそふとも しはしこたへて あるへきを

(1) 水戸藩執政

あらしにあへす 散さくらかな

廿二日

会藩中沢生⁽¹⁾来る、炮台之事を談す、又彼に附して肥後殿に、御誠実を押立、因循関東風にて八万解

成りかたからんと、其他関東之形勢を申す、

聞く、我門横幕生は紀藩也、彼討手横巻某

之手に附横死す、こは横幕生議論盛る者ゆへ、

惣将へ対し論破甚盛、彼言詰まりて答ゆる

こと能ハさりしか、其部下不意に起て鎗にて突く

と云、また別に嫌忌あることにや、詳説聞へす

○鷹取藩^(高)にても、家老之指揮、戦闘之図を

失し、戦士不悦、内破れの勢あり、藤堂家

また同断と云

○備前之船大工来る、端舟打建之事を申す

○有馬⁽²⁾へ馬を遣す、近々神戸江引移之事申遣

(1) 中沢帯刀(会津藩大砲方御雇勤)

(2) 有馬則篤(大坂町奉行)

す

廿三日

近藤⁽³⁾・加藤⁽⁴⁾之兩人越前より帰る、春嶽公⁽⁵⁾之御返書持
参、吾先日嶽公江拜書して云、

謹而奉呈拙書、閣下益御英祥被為入

万々芽出度奉存候、微臣義先月廿八日俄⁽⁶⁾ニ雅

楽頭殿上京 御機嫌御伺之為御使被仰付

候ニ付、附添上坂可仕旨被 仰渡、海上無滯

当九日着坂仕候、

当六月

上様 御帰東已来、江都一定之義無

御座、紛々空論、諸役遷転無虚日、

形勢は日々危険、唯々累卵之如くに御

座候、此節ニ到候ては、板倉初大小監察五⁽⁷⁾・

六輩大ニ苦心仕居候へ共、元来定論不相立

(3) 近藤長次郎(志士 土佐藩出身 海舟門下)

(4) 加藤廉之助(海舟門下)

(5) 松平春嶽(慶永越前藩前藩主)

(6) 酒井忠績(老中播磨姫路藩主)

(7) 板倉勝静(老中備中松山藩主)

傍議に被相妨候而已、

此程京師變動御座候信相達候節、

上様御直ニ

御所之處如何にも御心配被思召候間、速ニ

御上洛被遊度被 思召之由、閣老江仰御座

候趣、小臣輩窃ニ拝承、実ニ御誠実之

英意難有義、感佩涕泣仕候義ニ御座候、

右ニ付雅楽頭即日御使被 仰付、其後四・五日

を経候て、諸有司江不遠 御上洛思召之由

被 仰出候処、役々議論、兎角一定不仕、

是は全く天下之形勢不案内より相生、

且当今 將軍之御職掌如何と申事

を相忘れ、如此 御英意も下に貫通

薄く相成候哉と慨歎仕候、

関東にて 閣下御上京之風聞盛にて、

既に御発途と承居候処、未夕実説を

不得、内々閣老初有志之者は、一日千秋

之思を仕居候義にて御座候間、島津三郎⁽¹⁾

其他上京前ニも御憤発御発途御座候

様奉存候、何分有志輩之着眼此一事

にて、其上高明正大之御卓識を以て、御誠

実ニ天下之形勢

叡聞相成候様仕度、大凡天下は唯一是

而已、瑣々たる紛擾は則士気を鼓舞

仕候好機会と相成、今此時御憤発無御座

候ては、是迄御報国之御苦心一途に画屏^{マコ}

と相成可申哉、更に為 閣下に相惜候而已

に無之、皇国之御為ニ深く相惜候義

に御座候、雅楽頭も内実御上京を相待

候事にて、既に此周旋手段を失ひ候と、歎息

(1) 島津久光(薩摩藩主父)

仕居候、

関東にて鎖港御談判之説相起候も、実に無御扱訳にて、

上様御事度々御請暫時ニ反復^覆仕候を

歎候より相発候事ニ御座候、其上諸有司何分困難相極不申候ては憤発無之、旁

被仰出も御座候へ共、矢張依旧因循空論

消時日候、内々関東にても、閣下・島津

家・細川家其他へも御使にて御相談御座

候趣、有志は至極感佩、其御成功を相待

居候事ニ御座候、然るを御憤発延引

仕候ハ、大ニ出望^失、孰か

皇国興起之任に当可申哉、且ハ諸家

へ信を御失可被遊歟、昨年御上京之節

拝承仕候御意延候は、今此時と愚考

仕候、猶申上度義も御座候へ共、拙文不如意
唯々微衷を以て入高聴候而已

恐懼謹言

九月十日

右御答に云、

芳章到来、怡悦不淺、直ニ展閱、秋冷之砌

先以 上様益御機嫌能被為入、御同意

奉恐悦候、随而足下御起居清安、就中

今般は姫路閣老登⁽¹⁾ 京ニ付、御差添御

上坂、海上無御滯由承之、珍重不啻存候、陳ハ

当夏 上様御帰東後、江戸之形勢垂

示、別而方今、松山閣老始大小監察大ニ苦

心被致候趣、且此程 京師一變動ニ付、

上様御劳心被為遊、速ニ御 上洛之令被発

候由、如諭実ニ御誠意之 英断、遠境

(1) 酒井忠續(老中
播磨姫路藩主)

(2) 板倉勝静(老中
備中松山藩主)

相伺候ても銘肝感泣之至奉存候、右ニ付、姫路

閣老即日御使被 仰付、今般上

京相成候趣、就夫委細貴慮被申越

致承知候、既ニ登 京之儀は、当夏以来之

国議にて、 京師變動或は接^(ママ)海外船

渡来、不測之動乱等有之候節は、速ニ父子

共馳登り、為 皇国乍不及尽力、且は

奉守護

鳳輦候心得罷在候段は、兼而弊藩

中へも申付置候事に候、且又先月十八日

京都騷擾ニ付、当夏已来之国議も有

之ニ付、父子共速ニ登 京可致之处、

小子逼塞之儀、於 公辺は先達而

御赦免之命相蒙候へ共、

朝廷にては未夕逼塞中之御取扱之由ニ而、

即別紙之通伝奏衆より御書付御渡有之、

右は御免之義従 公辺

天朝へ御奏達無之事哉、其辺判然難

致二付、今度越前⁽¹⁾守東着之上、夫々取調

候筈二御座候、右之次第故、只今押而登

京いたし候ては、却而奉対

天朝奉恐入候事故、差扣居申候、乍去、只今

二も 内降勅等有之候へは、速二登

京、不肖之身乍不及為

皇国如何様共紛骨^(ママ)碎身尽力、二百年

来之 洪恩二奉報度心底三而候間、此

段は区々之衷情亮察被有之度候、

姫路閣老へも、御序之節右之趣御致意

可給候、書若尽言、大略之趣意而已申

陳候、書外縷々之余緒は、近江⁽²⁾より昶次郎⁽³⁾

(1) 松平茂昭(越前藩主)

(2) 島田近江(越前藩側用人)
(3) 近藤長次郎

江篤と申聞候様申付置候間、昶次郎より詳ニ

御聞取可給候、段々懇篤之紙上、依旧厚

志万々令感謝候、草率之布答

海涵判誦所希候、以上

秋晚十七日

春嶽

麟太郎殿

○聞く、越前邦内漸く異議起り、中根鞆負・村田⁽¹⁾

巳三郎・三岡八郎・青木甚兵衛之輩皆退られ、⁽³⁾

政令また一変せんと欲する勢あり、横井先生⁽⁴⁾

之建議変せん歟、可歎、古より俗吏国を

誤主を辱しむること、我書到るに及て、有志輩

大に悦び、置酒して同志を会すと

廿四日

聞く、紀州家近々坂城へ入ると、これ何等の

説ぞ、彼家一国之政令不被行届、又海岸百

(1) のち雪江(六月十四日譴責、蟄居)

(2) 村田氏寿(八月朔日目付を罷免、御側物頭に転ず)

(3) のちの由利公正(八月十四日譴責、蟄居)

(4) 横井小楠(八月十一日越前藩を致仕、肥後へ帰藩)

(付箋 異筆カ)
「廿五六七ヲ省キ余皆抄」

有余里一も兵備なし、また此地を護す、真

に児戯可歎、窃に思ふ、此地殷富若山^(和歌山)

の比にあらず、私せんとする歟不可知、今哉

尊王家と自称する家、皆私営私欲を

風雲の会に乗せんとす、可慨歎

○此夜乗船、夜中神戸村江到る、風順よろし

からす

廿五日

神戸村江着、名主四郎太夫⁽⁵⁾の家に寓す

廿六日

廿七日

布引へ行く

廿八日

今夕順動船着津、荒井来る⁽⁶⁾ ○聞く、細川一家

大に憤発、天下之形勢危険、一国之事にあらず、

(5) 生島四郎太夫

(6) 荒井郁之助(軍艦頭取)

正大之議を以て天下に告げ、同志と共に

天朝・幕府を説かむと、これ一国之議也と云

廿九日

夕、鯉魚門船入津、島津三郎乗船、他に越前・

長崎・筑前及び薩船共四隻皆入津す

十月朔日

荒井・肥田⁽¹⁾来る ○聞く、薩藩士之説に云、此度之

上京、開鎖之論にあらず、今国家專とする処、

興国征夷にあり、区々として鎖港を論すへき

時にあらず、彼か往来何そ妨げん、速に国内一致

興国之武備立されは、大業成るへからず、若

天朝此挙を御許容あらされは、決て攘夷

之奉命すへからず、朝敵として討する国あらは

又討せられん而已、是国内の事、薩家一家の挙

而已、若外夷と戦争し、一国にても失ふ時は、臭

(1) 肥田浜五郎(軍艦頭取)

を外蕃に伝ふ、国辱これより甚敷はなし、我
か国爰に解あり、御許容なき時は、速に帰
国せんと也

二日

肥田生来る、関東及び邦内の形勢、我建議
を示す、彼少しく解せし趣あり

○此日、江戸之監察并同役江御用状差出す、
監察へ聞ける所の諸説を告げ、憤発を進
む ○又、京師之監察戸川鉾三郎⁽²⁾へ一封遣す、
云、諸侯大に憤慨す、今また大議を□^解せし者
多し、宜敷因循を去り、機を失せしむる
こと勿かれと云々

三日

三卷目江つゝく

(2) 戸川安愛(冒付)

【最終頁に記入】

○神戸屋敷取建入用大凡

○屋敷地八反余并樹木代共 五拾貳兩

六兩

○建家一ヶ所 右引移、地ならし共 三拾兩

○塾 三間幅、拾間之長、新規建具疊共 百七拾三兩

○外台所・雪隠・馬屋・門番所 新規 七拾七兩

○屋敷外周三方土堤四尺之高、堀四尺幅、大凡百間余、芝代

築上ヶ共 拾五兩 生田往還之方すき下ヶ 拾五兩

からたち百三拾間土堤之上江植附、但一間二付十一本並

一本
廿文宛

五兩

【裏表紙見返しに記入】

○引家 疊 建具

疊拾六疊 十七匁宛四兩

唐紙八枚 一兩貳分

障子拾六枚 貳兩

拾八兩

天井新規
湯殿
貳兩貳分

○門 三兩
○松ノ樹植附 貳兩

○竈 貳兩
○仮塀 貳兩
庄屋・年寄・御代官・
手代江地所貸入祝義
三兩

○台所向道具 八兩

【海舟日記 二】に付属する文書】

① 見返しに貼付

(異筆カ)

箱根	藤沢	昼休
沼津	小田原	泊
十一り半	九り半	

伏見	石部	亀山	舟中	岡崎	荒井	袋井	丸子	吉原
	大津 四り八丁	土山 十二り半	四日市 十一り	宮 十一り	赤坂 十り八丁	浜松 十二り	金谷 十一り半	江尻 十一り

② 1・2丁めの間に挟み込み

(自筆カ)

吉井忠助	大久保市造	高崎伊太郎	岩下佐次右衛門	松山深	広瀬健太	武市半平太	正木鉄馬
------	-------	-------	---------	-----	------	-------	------